ごあいさつ

公益財団法人　日立財団
理事長　田中幸二

昭和四十七年から始まった「小平記念作文」は、今回で四十五回目という節目を迎えました。

これもひとえに、これまで応募していただきました小中学生の皆さん、そして、募集に際しご理解とご支援を賜りました学校関係者の皆様やご家族の皆様のおかげであり、あらためて厚くお礼を申し上げます。

書くことを通して感性が磨かれ、豊かな心や他の人々と相和（あいわ）す心が育まれ、それが世の中の発展につながるという、日立製作所創業社長である故小平浪平翁の思いを事業として形にしたのが、「小平記念作文」であります。

今回も将来の夢、家族や友達との絆、自然・環境などのテーマに沿って、一万八千編を超える数多くの作品を応募いただきました。私は入賞した作文を読むことを毎回楽しみにしています。そして、毎回あたらしい感動に出会います。

今回も将来の大きな夢に向かって一生懸命に頑張っている姿や思いやりの気持ちを大切にする素直な心が活き活きと描かれている作文に触れ、とても感激しました。

書くことが、自分自身の考えを整理したり、見つめ直したりすることにつながる。作文を読みながら、書くことの大切さを改めて強く感じた次第です。

この小冊子は、応募いただいた作品の中から慎重な審査を経て入賞した作品を収めたものですが、今回残念ながら入賞できなかった作品にも心打たれる素晴らしい作品が数多くありましたことを申し添えさせていただきます。

当財団では、今後とも小中学生の皆さんの健やかな成長に少しでもお役に立てるよう事業を推進してまいりますので、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

最後になりましたが、今回の「小平記念作文」の実施にあたり、ご多用の中、熱心に審査していただきました審査委員の皆様に、お礼を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

平成二十八年十二月

平成28年度 第45回 小平記念作文 入賞者表彰式時の記念写真

平成28年12月13日
於：ホテル天地閣

平成28年度　第45回　小平記念作文　審査委員

茨城県教育庁　学校教育部　義務教育課	副参事	安原　優
水戸市立　国田義務教育学校	校長	吉井　由隆
ひたちなか市立　外野小学校	校長	石川　富子
日立市立　大みか小学校	校長	村田　浩子
笠間市立　南中学校	校長	市毛　正明
公益財団法人　日立財団		

お祝いのことば

審査委員
茨城県教育庁学校教育部義務教育課　副参事　　安　原　　優

小平記念作文に素晴らしい作品を応募し、入賞されました三十三名の皆さん、おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

小平記念作文は、小・中学生を対象に、身近な人びとの生活や社会・文化などについて感じたこと、考えたことなどを作文に書くことで、協調性を養い心が豊かになることをめざし、一九七二年から実施されています。

四十五回目を迎えた今年度は、小中学校あわせて一万九千点近くになる応募があり、応募数とともに作品のレベルの高さについても本県を代表するものとなっております。

わたくしも審査委員として、皆さんの作品を読ませていただきましたが、様々な体験や人々との出会いを通して、感性豊かに多くのことを感じ取ったり、じっくりと考えを深めたりして自分の成長につなげていることが伝わってまいりました。また、自分を見つめ、困難に立ち向かう強い気持ち、周りの人々や物事に対する温かい気持ちなど、皆さんのまっすぐな心に触れ、感動で胸が熱くなりました。

特に、最優秀賞を受賞された、菅谷乙羽さん、北村桃奈さん、仲澤美穂さんの作品には、描かれている場面の状況や心の動きなどが巧みに表現されており、今でもわたくしの心に深く印象に残っています。

さて、今日、急速な情報化や技術革新の中で、わたしたちの生活は大きく変化しています。また、各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できなくなっている中で、将来の社会を予測することは非常に難しくなっています。

そういった、予測できない未来に対応するためには、一人一人が社会に主体的に向き合って関わり合うこと、そしてその中から課題を見いだし、自らの可能性を最大限に発揮しながら他者と協働してよりよい社会を築いたり、幸福な人生を自ら創り出していくことが重要になってまいります。

茨城県教育委員会としましても、今年度から五年間を計画期間とする新たな「いばらき教育プラン」を策定しました。プランでは、基本テーマ「一人一人が輝く　教育立県を目指して」に加えて、「子どもたちの自主性・自立性を育もう」をサブテーマとして位置付け、様々な施策を通じて、皆さんの学校生活がより充実したものとなるよう努めているところでございます。

この小平記念作文には、家族や友人、地域の方との交流や、自分の体験や思い出などを改めて見つめ直したり、自分の将来についての考えを広げたり深めたりする皆さんの姿が描かれていました。これからも学校や家庭、地域と主体的に関わることを通じて、課題を見いだし解決するために必要な力を身に付けていってほしいと願っております。

結びに、本県の児童生徒の心の表現の機会を永年にわたって設けていただいております公益財団法人日立財団の御厚意に心から感謝申し上げますとともに、益々の御発展を祈念し、お祝いのことばといたします。

講　評

審査委員
水戸市立国田義務教育学校　校長　　吉　井　由　隆

この度、「第四十五回小平記念作文」に応募され、栄誉ある賞を受賞された三十三名の皆さんに、心よりお祝いを申し上げます。御入賞、誠におめでとうございます。

さて、今年度も茨城県内の四百五十九校から、一万八千九百三十二点もの作品が寄せられました。沢山の児童生徒の皆さんが、小平記念作文に挑戦してくれたことに、大きな喜びを感じています。皆さんの思いがこもった作品を、審査委員一同、期待と緊張感をもって、一点一点しっかりと読ませていただきました。どの作品も日々の体験や見て感じたことをもとに、家族や友達、身近な人々との関わりによって心に深く刻まれた思いが、素直な言葉で丁寧に表現されています。特に皆さんの作品は、心を開いた柔軟なものの見方や感じ方が伝わってくる、輝きのある作品で、私たち審査委員は、強く心を引き付けられました。

ここで、最優秀賞に選ばれた三人の方々の作品に、触れてみたいと思います。

小学校低学年の部、水戸市立笠原小学校二年生の菅谷乙羽さんの「ひいおばあちゃんの目のかわりに」は、大好きなひいおばあちゃんを何とかして助けたい、元気づけたいという強い思いが伝わってくる作品です。目が見えなくなったひいおばあちゃんは、どんな気持ちでいるのか、どうすればにっこり笑顔になれるのか、一生懸命に考える乙羽さんの優しさが、作品のあちこちにあふれています。乙羽さん、ひいおばあちゃんが楽しみにしている音読の他にも、学校のことやお友達のこと、それから、歌や鍵盤ハーモニカの演奏なども聞かせてあげると、もっと喜んでくれると思います。これからも乙羽さんの笑顔と元気に頑張る姿を、大好きなひいおばあちゃんの心の目に届けてください。

次に、小学校高学年の部、石岡市立小幡小学校四年生の北村桃奈さんの「悔しさの中で見つけたこと」は、オセロの大会で負けて悔しい思いをした経験から、大好きなオセロに挑戦できるという喜びや、沢山の人々に支えられてきたことに気付くことができたという、心の成長が描かれた優れた作品です。文章中の「負けた瞬間、私は頭の中が真っ白になった。」という所では、全国大会入賞を目指し、一年間に渡って努力を重ねてきた桃奈さんの心の痛みが胸に迫ります。桃奈さんの思いを受け止め、大切なことに気付かせてくれたのは、懸命に努力する姿を見守ってきたお母さんの「よくがんばったね。」という言葉でした。お母さんの愛情いっぱいの言葉のお陰で、「また来年の大会まで、精一杯頑張っていこう！」と

いう桃奈さんの新たな目標が生まれました。悔しさを受け止めて、心に深く刻んだ経験が、大きな道しるべとなりましたね。私たちはもちろん、桃奈さんを取り巻く全ての人々は、全国大会入賞の夢が叶うことを祈っています。

最後に、中学校の部、かすみがうら市立霞ヶ浦中学校一年生の仲澤美穂さんの作品「我が家のちょっと変わった伝統行事」は、お盆の風習や家族団らんの様子が丁寧に描かれている、魅力あふれる作品です。何でも簡単に、手早く済ませようとする今の世の中にあって、祖先を大切に思い、家族みんなで手厚く迎える姿に、強く心を引き付けられました。昔から伝わる習慣や行事には、行うための目的や意味があることを、仲澤さんは経験をとおして理解し、伝統行事を守っていくことの大切さを綴っています。文章中の「先人たちが築き上げた習慣や文化を大切にし、次の時代に、きちんと伝えていけるような人物になりたい。」という仲澤さんの思いから、無くしてはいけない、大切なものを教えられたような気がします。我々大人も考えさせられた、心に残る作品です。

さて、三十三名の受賞者の皆さん。皆さんは、経験したことを心の中でしっかりと見つめ、言葉に表すことで、作品を宝物として残すことができました。五年後、十年後に改めて自分の作品を読み返して、それぞれの成長を感じてほしいと思います。また、これからも広く世の中に目を向けて、様々な経験を重ねながら心豊かな人間に成長し、学校や社会で活躍されることを期待しております。

結びに、子供たちの豊かな生活体験を支えてくださったご家族の皆様と、応募に際してご指導頂きました各学校の先生方、さらに「人を育み、未来へ繋ぐ」という理念のもと、永年にわたってコンクールを主催されている日立財団の皆様に、心より感謝申し上げます。

小学校　低学年の部　（敬称略）

最優秀賞	ひいおばあちゃんの目のかわりに	水戸市立笠原小学校	二年	菅谷乙羽……1
優秀賞	なつやすみのおもいで	水戸市立渡里小学校	一年	入野瑛太……2
〃	ぼくとれいくんの夏休み	筑西市立長讃小学校	二年	武井晏慈……3
〃	わたしの自まんのおじいちゃん	茨城町立長岡小学校	三年	野村美空……4
〃	ぼくの妹、美月	土浦市立神立小学校	三年	藤原優輝……6
〃	家ぞくの大切さ	筑西市立川島小学校	三年	梅山颯馬……7
奨励賞	ピッチ	ひたちなか市立東石川小学校	一年	大山碧依良……8
〃	ぼくはさかなになった	潮来市立日の出小学校	一年	大輪悠太……10
〃	ぼくのおまもり	日立市立宮田小学校	二年	平子大悟……11
〃	弟とぼく	茨城大学教育学部附属小学校	三年	菅庭新大……12
〃	お父さんの通しんひょう	日立市立水木小学校	三年	木幡一葉……13

小学校　高学年の部

最優秀賞	悔しさの中で見つけたこと	石岡市立小幡小学校	四年	北村桃奈……15
優秀賞	受けつがれる願い	龍ケ崎市立馴馬台小学校	五年	加藤らな……16
〃	土の中のお宝	牛久市立牛久第二小学校	五年	寺澤勇飛……18
〃	思いやりを乗せて走るバス	茨城大学教育学部附属小学校	六年	根本桜樺……19
〃	おもいやり	神栖市立息栖小学校	六年	遠藤智蔵……21
〃	初めて被災者となって	常総市立大生小学校	六年	大野太聖……22
奨励賞	少しの勇気	守谷市立郷州小学校	四年	鈴木ゆいね……24
〃	おもいやり	下妻市立大宝小学校	四年	髙田大馳……25
〃	みんなの笑顔を見るために	ひたちなか市立津田小学校	五年	大宮夏輝……27
〃	通じ合うために	つくば市立光輝学園松代小学校	六年	西岡美咲……29
〃	おもいやり	つくばみらい市立谷井田小学校	六年	深作桔平……30

中学校の部

最優秀賞　我が家のちょっと変わった伝統行事　かすみがうら市立霞ヶ浦中学校　一年　仲澤　美穂……32

優秀賞　母と私の絆「ありがとう」　日立市立平沢中学校　一年　原　寧々……34

〃　吃音と兄　日立市立台原中学校　一年　高橋　彩都……36

〃　平和大使として　石岡市立石岡中学校　二年　杉嶋　茜里……38

〃　私の夢　ひたちなか市立勝田第二中学校　三年　卜部　和奏……40

〃　今の社会と私　筑西市立下館西中学校　三年　桜井　航希……41

奨励賞　大人になる　つくば市立桜並木学園並木中学校　一年　亘　虹海……43

〃　「言語」という大きな壁を乗り越えて　茨城県立古河中等教育学校　一年　永木　優菜……45

〃　手術を受けて気付いたこと　茨城町立明光中学校　二年　髙田　直紀……47

〃　自然を考える　土浦市立土浦第一中学校　三年　戸田壮太郎……49

〃　きっと大丈夫　かすみがうら市立下稲吉中学校　三年　辻井　茜……51

小学校　低学年の部
最優秀賞

ひいおばあちゃんの目のかわりに

水戸市立笠原小学校　二年　菅谷　乙羽

わたしには、ひいおばあちゃんがいます。年は、八十七さいです。ひいおばあちゃんは、わたしがあかちゃんのころ、よくだっこしてくれていたそうです。

「ひいおばあちゃんがだっこすると、ふしぎとなきやんじゃうんだよね。」

と、おかあさんが話すことがあります。

ひいおばあちゃんは、やさいをつくったり、すいかをつくったりすることがじょうずで、おにわでたくさんつくっていました。夏になると、ひいおばあちゃんがつくってくれたすいかをおにわでたべたことをおぼえています。わたしが「おいしい。」というと、「よかった。たくさんたべな。」とえがおでいってくれました。

ひいおばあちゃんの目が、なん年か前からすこしずつ見えなくなってきました。りょくないしょうという目のびょうきだと、おかあさんがおしえてくれました。一年前からは、ぜんぜん見えなくなってしまいました。トイレに行くとき、かべやものをさわりながら行きます。たまに、頭をドアにぶつけてしまうことがあります。ごはんをたべるときも、こぼしてしまうことがあります。まえみたいにやさいをつくらなくなったので、そとに出ることもすくなくなってしまいました。いえの中で一日中ラジオをきいていて、元気がなくなってしまいました。そして、わたしのかおをもう一ど見たいな、となんどもいっていました。

わたしは、目をつぶって歩いたことがあります。一人ぼっちになったみたいで、こわくてすぐに目をあけてしまいました。ひいおばあちゃんは、いつもこんなかんじなんだなと思うと、なにかてつだってあげたい気もちになりました。

ひいおばあちゃんがげんきになるために考えたことは、音読のしゅくだいをきいてもらうことです。ひいおばあちゃんはものがたりがすきで、よみおわるとうれしそうなかおではくしゅしてくれます。たまに、かんそうもいってくれます。ひいおばあちゃんがすきなお話のときは、二かいよむこともあります。そのほかに、ごはんをはこんでメニューを教えてあげます。おはしを手にわたして、おちゃわんを手にのせてあげます。トイレに行くときは、手をひいてあげたりします。

だんさがあるところは、こえをかけたり、ゆっくり歩いたりして、ころばないように気をつけます。

わたしは、ひいおばあちゃんがにっこりわらってくれるかおが大すきです。わたしがなにかおてつだいをすると、ひいおばあちゃんはとってもうれしそうに、にっこりわらってくれます。ひいおばあちゃんの目のかわりになれるようわたしにできることをもっと見つけたいと思います。そして、ひいおばあちゃんの目が見えるようになるまで、ずっとつづけていきたいです。

―――――◇―――――

優秀賞

なつやすみのおもいで

水戸市立渡里小学校　一年　入野　瑛太

「まだかなぁ。まだかなぁ。」

ぼくはなんどもとけいをみた。するとおかあさんが、

「まだやくそくのじかんじゃないよ。一じになってないでしょ。」

といった。

「とけいのはりってうごくのがおそいんだね。」

すると、となりできいていたおばあちゃんがぼくをみてにっこりわらった。

きょうは、うしくのおばあちゃんのいえでようちえんでいちばんのなかよしだったなおやくんとプールであそぶやくそくのひだ。

一じになって、やっとなおやくんがやってきた。すごくうれしくて、ぼくはにわにとびだした。

「ひさしぶり！」

ってあいさつしたら、びっくり。そつえんしきのときははえてなかったなおやくんのまえばが、おとなのはになっていた。

ぼくはイーっとやって、さいきんぬけたばかりのまえばをみせて、なおやくんをわらわせた。

きがえたら、さっそくプールだ。みずでっぽうでたたかって、スライダーでどっちがとおくまですべれるかきょうそうした。おかあさんたちにみずをかけたらおこられた。

「ぼくのがっこうは、三かいしかプールできなかったんだよ。」

ってなおやくんがいったから、

「えいたのがっこうでは、ふくをきたままプールにはいったんだよ。」

っておしえたら、こんどはなおやくんがびっくりしていた。たのしくてたのしくて、あっというまにさよならのじかんになってしまった。

「ぜったいぜったい、またあそぼうね。」

ふたりでやくそくして、なおやくんはかえった。

ぼくは、三がつにうしくからみとへひっこした。そつえんしきがおわったら、みとにひっこすときいたとき、ぼくはないてしまった。

ようちえんのともだちとわかれて、べつのがっこうにいくのがとってもいやだった。そつえんしきのれんしゅうで、ともだちひゃくにんできるかなってうたうたびにドキドキした。

わたりしょうがっこうのにゅうがくしきのとき、しんぱいでなきそうだった。

でも、すこしずつともだちができた。さいしょはとなりのせきのしおりちゃん。つぎにまえのせきのゆいなちゃんとあんりちゃん。おなじはんのほづきくん。かかりがいっしょのりゅうくん。

いまではまいにち、がっこうにいくのがたのしみだ。なつやすみがおわったら、みんなといっぱいあそびたいな。

そして、なおやくんとあそんだこともみんなにはなしたいな。

◇

優秀賞

ぼくとれいくんの夏休み

筑西市立長讃小学校　二年　武井　晏慈

「あんじくん、あんじくーん。」

ぼくの名前をよぶ、小さくてかわいいこえがするよ。何回も何回もよばれるので、ぼくはうれしくて…でもちょっとはずかしくて、むねがキュッとなるような気もちがする。

今年の夏休み、ぼくはなすにりょこうをした。お父さん、お母さん。千ばにすんでいるおじいちゃん、おばあちゃん。東きょうにすんでいるいとこのれいくんと、その家ぞく。いつもははなれてくらしているみんなが、大しゅうごうだ。ぼくは、りょこうが何か月も前から楽しみで、ワクワクがとまらなかった。カレンダーを見て日にちを数えたり、みんなで何をするか考えているだけで、かおがニコニコになってしまった。

いとこのれいくんは、ぼくより四さい年下だ。赤ちゃんのころは、お気に入りのおもちゃをとられたり、かみの毛をひっぱられたりして、いやな思いをしたこともあった。でも歩けるようになると、どこに行くにもぼくのあとをついて来て、かわいかった。今では、「あんじくん」とぼくの名前をたくさんよんで、何でもまねするんだよ。

みんなは、れいくんのことを「いとこ」と言うけれど、ぼくは「弟だ」と思っている。ぼくにはきょうだいがいない。だから、れいくんにあうと、

「もし、弟がいたらこんなかんじなのかな。」

と、お兄ちゃん気分になり、じ分がすこしだけたくましくなったような気がするからだ。

なすでは、ぼく場に行った。子牛にミルクをあげると、のむ力がつよくてほにゅうびんがひっぱられてしまった。まるでつなひきをしているみたいだったよ。じょうばをしたときには、うまがきゅうに立ちどまった。何だろうと思って見ていたら、おしりから大りょうのかたまりが出た。どうぶつたちは、何てじゆうなんだろう。こんなこうけいはじめて見て、ぼくたちは夏のあつい空の下、大わらいしてしまった。

りょこうの二日かん、ぼくたちは何をするのもいっしょだった。ぼくをしたってくれる小さな弟分のために、ぼくも何かしてあげたいと思い、お兄ちゃんやくをがんばったつもりだ。楽しいじかんはあっという間。さみしさもあるけれど、またいつでもあえるさ、そんな気もちでりょこうはおわった。

そう、家ぞくや親せきってふしぎなんだ。はなれていても、あえばすぐきょりがちぢまる。いつもいっしょにいるみたいに、パーッとえがおの花がさいて、きもちがホッとするよ。そこには、生まれたばかりの赤ちゃんから、八十・九十さいのおじいちゃん、おばあちゃんまではばひろいつながりがある。いざというときはたすけあい、うれしいこともかなしいことも、ともにあじわっていくんだね。ぼくの名前をよぶかわいいこえも、ときには、心づよいエールになるのかもしれないな。

---◇---

優秀賞

わたしの自（じ）まんのおじいちゃん

茨城町立長岡（ながおか）小学校　三年　野村（のむら）　美空（みく）

「じいじ、来たよ。」

びょういんのベッドでねているおじいちゃんの耳もとで、声をかけます。へん事はありません。でも、一生けんめい目を開いてわたしの方を見ます。そしてまばたきで合図をしてくれます。

わたしが小さかった時、おじいちゃんはわたしのことを、たくさんかわいがってくれました。おふろに入れてくれたり、自てん車ののり方を教えてくれたり。ようち園に入ってからは、ほ育さんかんや遠足に来てくれました。おじいちゃんは、りょう理も上手でした。わたしは、おじいちゃんが作ってくれるチャーハンが大すきでした。

わたしが年中の冬、おじいちゃんのぐ合が急に悪くなりました。かわっていくおじいちゃんのすがたを見て、ふあんでし方ありませんでした。だから、びょういんからリハビリしせつにうつって、少しよくなり、いっしょにおやつを食べられた時は、とてもうれしかったです。でも、だんだん体が弱り、今は口から何も食べられません。声も出ません。

おじいちゃんは、せんそうの時だいに生まれました。お家がまずしかったので、中学生の時から、毎朝新聞はいたつをして家ぞくをたすけました。わたしのおばあちゃんを早くになくしたので、わたしのお母さんを一人で育てました。近所のお年よりがこまっていると、植木を切ったり電球をかえたりしてあげました。つらくてもいつも前を向いて、一生けんめいだったと、お母さんが話してくれました。きびしさの中にその何ばいものやさしさがあったから、お母さんもがんばってこれたそうです。

「じいじ、すごいね。じいじ、ありがとう。」

今のおじいちゃんは、ベッドの上だけれど、一生けんめい生きています。一生けんめい家ぞくのきずなをつないでくれています。わたしは、何か役に立つことをして、たすけてあげたいなと思います。元気な顔を見せてあげて、たくさん話しかけて、びょう室におり紙をかざってあげて・・・。それで少しでも元気を分けてあげられたら、うれしいです。

おじいちゃんは、やさしくて心の強い人です。わたしもおじいちゃんのように、いつでも前を向いて、どんなこんなんにも負けない強い心でがんばれる人になろうと思います。だれとでもなかよくして、みんなをえ顔にできるやさしい人になろうと思います。

これから先も、少しずつ大きくなっていくわたしのすがたを、おじいちゃんに見ていてほしいです。そして、

「美空ちゃん、今日も元気な顔を見せてくれてありがとう。ま

た少し、大きくなったかな。今日のおり紙もきれいだね。」と感じてもらえるように、今日もおじいちゃんに会いに行きます。

「じいじ、来たよ。」

優秀賞
ぼくの妹、美月

土浦市立神立小学校　三年　藤原　優輝

ぼくの家族は五人家族です。六才と三才になる二人の妹がいます。その中でも、六才の妹について書きたいと思います。

美月はダウン症で生まれました。生まれつきしんぞうにあながあいていました。そのため、赤ちゃんの時から色々なびょういんやリハビリに通っています。ぼくもお母さんといっしょに、美月のびょういんやリハビリにつきあいました。いたいちゅうしゃをうって、ないている美月がかわいそうで「みーちゃんがんばれ。」とおうえんする事しかできませんでした。できる事ならぼくがかわってあげたいと思いました。

うれしい事もたくさんありました。リハビリをがんばってねがえりができるようになり、二才には、ハイハイができるようになりました。ぼくが美月におもちゃをわたしたりして遊んであげると「ケラケラ。」わらい、よろこんでくれました。ぼくは美月のわらった顔を見るのが大すきです。

美月はほかの子よりも、色々な成長がゆっくりです。こつこつ練習をして、一つ一つできるようになっていきます。そんながんばり屋の美月をかっこ良いと思います。ぼくも、美月のようにこつこつ練習して平泳ぎを泳げるようになりたいです。

美月と同じびょう気を持った子どもたちのあつまりで、たくさんの友だちもできました。ダウン症はみんな、顔がにているといわれているけれど、よく見るとにていないし、すきな事やとくいな事もそれぞれちがいます。ぼくたちとかわりないと思いました。ただ、ぼくたちよりもきん肉が弱くて、体がつかれやすいのでたくさん走ったりする事はむずかしいので、ぼくたちが気をつけてあげなければいけないと思いました。

赤ちゃんのころの美月は、たくさんびょう気をして入いんもして、お母さんが美月に付きそってびょういんに行ってし

まって、とてもさみしい気持ちになったけれど、さい近の美月は体も強くなり、ぼくとケンカも出来る位力持ちになりました。

これからも、家族みんなでたくさん遊んでたくさんケンカをして、大変な事もたくさんあると思うけれど、幸せな事は、もっとたくさんあると思うのでこれからも、家族仲良くくらして行きたいと思います。

◇

優秀賞

家ぞくの大切さ

筑西市立川島小学校　三年　梅山　颯馬

「お兄ちゃん、早く元気になってね。」

妹のビデオレターの声が耳からはなれなくて夜中に目がさめた。

「ああ、ここはびょういんなんだ。」

こわい気持ちとさびしい気持ち、それからひさしぶりに妹の元気なようすを見られてうれしい気持ち、いろいろな気持ちがまざって、目からなみだが出てきた。かんごしさんに気がつかれないように、声を出さないでぼくはないた。

ぼくの口にはさんそマスク、うでにはてんてき、むねにはパルスオキシメーターというけつえきの中のさんそのりょうをはかるきかいがつけられていて、自ゆうにねがえりもできない。びょう室は一人の部屋で、お父さんとお母さんい外は会うことができなかった。はなにツンとくるしょうどくのにおいと、シューというさんそマスクの音の中で、ぼくはずっと学校のみんなは今ごろなにしているのかな、と考えていた。たくさんのチューブにつながれているので、トイレに行くこともたいへんだし、右手だけでごはんを食べるのも一くろうだった。なんでぼくだけ入いんしなくちゃいけないんだ、という気持ちがだんだん大きくなっていった。ごはんを食べるのもめんどうになり、お父さんとお母さんが仕事の帰りに来てもあまり話をしなかった。

ぼくが入いんしてしばらくあとに、むかいのへやに三才くらいの女の子が入いんしてきた。その子はいつも大きな声でないていた。妹がないているようで、かわいそうだなと思った。いつもせわをしてくれるかんごしさんがぼくのてんてきをかえながら言った。

「あんな小さな子もがんばってびょう気とたたかっていてえらいね。そう馬くんもごはんをたくさん食べないとびょう気に勝てないよ。びょう気とたたかうのは、おいしゃさんでも、お父さんでもなく、そう馬くんなんだよ。」
ぼくは、びょう気はだれかのせいでなって、だれかがなんとかしてくれると思っていた。自分の体は自分でなおすんだとかんごしさんに言われて、今まであまえていた自分がはずかしくなった。お父さんやお母さんが身の回りのことをやってくれることはあたり前だと思っていた。自分の体が思うようにならなくなって、はじめて気がついたことがたくさんあった。かんごしさんはぼくに、まわりの人にかんしゃの気持ちをわすれてはいけないということを教えてくれた。
　たいいんするまでの間、かんごしさんとはいろいろな話をした。
「そう馬くんはお姉さんと妹さんがいるの。けんかするでしょう。女の子ってうるさいよね。」
ぼくは妹たちのことを考えるとおかしくてわらいながら答えた。
「うるさいです。でも、早く会いたいです。」

奨励賞
ピッチ

ひたちなか市立東石川小学校　一年　大山　碧依良

　なつやすみ、とてもかなしいできごとがありました。それは、たんじょうびにかってもらったいんこが、にげてしまったことです。
　そのいんこは、みずいろで、あたまとはねにちょっときいろのぶぶんがありました。めは、くろくてまんまるで、ほほにはあおいまるいしるしがありました。わたしは、そのいんこに、ピッチというなまえをつけました。
　八がつ七かのたんじょうびのひ、ピッチにであいました。ケースにはいっていたピッチは、ほかのいんこたちにかくれていました。
「どのいんこにするの？」
とおかあさんにきかれて、わたしはまよわずピッチをえらびました。みずいろのいんこがほしかったからです。おみせのしいくいんさんが、ピッチをとりあげてくれました。はじめてみたピッチのかおは、とてもかわいかったです。
　いもうともメロンといういんこをかってもらったので、にひ

きのいんこをいえにつれてかえりました。いんこはまだひななのでとぶことができません。おとうさんがてつだってくれて、あわだまというえさをつくってあげました。ピッチはさいしょ、はじめてのばしょにおどろいてしまって、えさをたべてくれませんでした。わたしは、しんぱいして、やさしくくびをなでてあげました。ピッチは「ピピッ」となきました。

ピッチがじょうずにとべるようになってきたので、ピッチとメロンをじゅうにとべる、おおきなとりかごにうつしました。ピッチもだんだんおちついてきました。わたしはピッチがかわいくてかわいくて、なんどもかごのまどをあけてなでていました。

ピッチが、いえのげんかんから、さっとにげてしまったのは、いっしゅんのことでした。わたしは、おおきなそらにとんでいったちいさなピッチをみのがさないように、まえのいえのおばあちゃんのにわにむかってはしりました。

「ピッチ!ピッチ!」

となまえをなんどもよびました。でもピッチはいません。「まだみつかる!」そうおもいましたが、めになみだがあふれました。

おかあさんがきて、わたしに、

「ピッチはじぶんでごはんをたべられないんだよ!どうするの!」

とおこりました。わたしは、おかあさんからはなれてかけだしました。そして、じぶんでもおどろくほどおおきなこえでさけびました。

「ままにはわからない。あいらは、ピッチのおかあさんなんだよ!!」

なみだがいっぱいでました。おかあさんは、もうなにもいいませんでした。わたしをだきしめてくれたので、わたしは、「ごめん。」といいました。

ピッチはとんでいってしまったけど、わたしがピッチのしあわせをねがえば、ピッチはしあわせにいきられると、おかあさんがおしえてくれました。ピッチげんきでね。さびしくなったらいつでもかえってきてね。まってるよ。

奨励賞

ぼくはさかなになった

潮来市立日の出小学校　一年　大輪　悠太

六がつ、おかあさんにむりやりスイミングにつれていかされた。ぼくは、水にかおをつけることができない。かみをあらうときも、おとうさんにかおをぬらさないようにあらってもらっている。だからスイミングのじかんは、かおをぬらさないようにするのがたいへんだ。ともだちがとなりで足をバタバタさせるれんしゅうをしていると、いつかおに水がかかるかヒヤヒヤしている。

なつやすみにはいって、おかあさんがあついからプールにいこうといった。ぼくは、かおがぬれるのはいやだけど、うきわもあるし、あつかったからいくことにした。小さいプールと大きいプールがあっていつも小さいプールであそんでいる。大きいプールにはいるときは、うきわかおかあさんにだっこしてもらっている。

「ことしは大きいプールも足がとどくよ。」

っておかあさんにいわれてすごくこわかったけど、つかまりながらはいってみた。

そしたら足がついた!!ひとりでたてたんだ。ぼくはすこしおとなになったようなきぶんになった。じめんを足でけってジャンプしながらあそんでいたら、かおに水がたくさんかかってしまった。でもきょうのぼくはこわくない。だって大きいプールにひとりでたてたんだから。ぼくはおかあさんにつかまっていっしょにもぐってみようとおもった。きょうのぼくならできる!!

いきをととのえて、せーのでもぐった。はじめてみた水のなか。ぼくはさかなになったようなきがした。おもいっきり足をバタバタさせるとまえにすすんだ。とてもきもちがよかった。なんどもなんどももぐってあそんだ。

つぎはおとうさんといっしょにいこう。おとうさん、きっとびっくりするだろうな。スイミングのコーチにもみせなくちゃ。つぎのれんしゅう日がまちどおしいな。

奨励賞

ぼくのおまもり

日立市立宮田小学校　二年　平子　大悟

「あっ、まずいな。まずいな。」

ぼくは、夏休みにはじめてディズニーランドに行った。とても楽しみにしていたんだ。あれものりたい、これものりたいって。そののりたかったのりものの一つスペースマウンテンにのるためにならんでいた時に、いつもの「まずいな」が出てきてしまった。そして、ぼくはスペースマウンテンにはのれなかったんだ。ぼくは、「いやだな」と思いはじめると、きゅうに心がふあんでいっぱいになってしまう。そして気もちがわるくなってきてしまう。そんなときのぼくは、おしゃべりが少なくなり、かおがまっ白になっているらしい。

スペースマウンテンにのれなかったぼくは、お母さんと二人で、ねえねたちがのりおわるまでベンチにすわってまっていた。あんなに楽しみにしていたディズニーランドなのに、どののりものにものりたくなくなってしまった。一ばん楽しみにしていたスターツアーズものりたくない。「まずいな」が出てきたらいやだから。それでも、お母さんやねえねに「のってみよう。」と言われ、のることにしたんだ。気もちがわるくなった時のためにふくろを一まいもらって。

それでも「こわいな。」「まずいな。」と思った。のるのやめようかなって。その時、さっきもらったふくろに「こわくないぞ。のれるぞ。」って言ってみたら、心がスーッとしてきたんだ。そしたら、かんたんにのれたよ、スターツアーズに。ぼくの大すきな「スターウォーズ」を楽しむことができたんだ。

それからは、スピードのはやいのりものにものれたし、たくさんのりものにのることができた。ちょっとこわそうだな、まずいなと思う時には、さっきのふくろに「大じょうぶ。」と言いながらね。だからぼくは、はじめてディズニーランドをおもいっきり楽しむことができたんだ。気がつけば、ふくろをどこかにおいてきてしまっていたけど。

今もぼくは「まずいな。」と思うことがある。六月からならいだしたけん道のおけい古がきつくて、と中でやめたくなる時とかね。何かからにげたくなる時とかね。そんな時に、ふくろをもつことにしたんだ。ディズニーランドでもらったふくろはないけれど、ちがうふくろをもって出かけることにした。「まずいな。」「いやだな。」「こわいな。」という気もちをぜんぶふくろにとじこめちゃうんだ。ぼくのよわい心もぜんぶね。

ふくろをもつことで、ぼくは少しだけつよくなれる。じしんのないことはやりたくないと思っていたけれど、やってみなければわからないよなと、思えるようになった。じしんなくても大じょうぶって、ふくろに言えるから。今までやったことがなかったことも、たくさんたくさんちょうせんできるんじゃないかな。ふくろは、ぼくのゆう気のもとなんだ。

ふくろをもったぼくはつよい。でも、いつかふくろがなくても、なんでもちょうせんできるつよい心をもった人になりたいな。

奨励賞

弟とぼく

茨城大学教育学部附属小学校　三年　菅庭　新大

「まだできないな。」

ぼくは、鉄ぼうをにぎって、ためいきをつきました。外はさむくて、鉄ぼうはカチンコチンにひえきっていました。二年生の冬に、お父さんといっしょにさか上がりの練習をはじめて、もう何日もたっているのに、なかなかできるようになりません。ぼくの体は、思うように持ち上がらず、鉄ぼうをひきよせることができません。

いっしょに練習をはじめた弟は、もうとっくに、できるようになっていました。それなのに、ぼくは全ぜんできなくて、弟に負けているかんじです。

ぼくの弟は、ぼくより二才年下です。うん動がすきで、とっても元気です。ぼくと弟は、いっしょにおもちゃで遊んだり勉強をしたり、いつもいっしょにすごしています。習い事のスイミングとピアノもいっしょに楽しくがんばっています。

ぼくは、弟のことが大すきです。ぼくはお兄ちゃんなので、勉強を教えてあげたり、いつもやさしくめんどうをみています。でも、弟に先をこされて、ぬかされてしまったようでとてもくやしかったです。

お母さんが

「ぜったいできるようになるよ。」

とはげましてくれました。弟も、足をふり上げるコツをアドバイスしてくれました。お父さんは、お手本を見せてくれたり手で足を持ち上げてくれたり、ぼくの練習につきあってくれました。

練習を始めて三か月目、季せつは春で、もう温かくなっていました。ぼくは鉄ぼうをにぎって、一、二、の三で足を力いっぱいふり上げました。いつもより、体が空中に上がった気がしました。とうとうさか上がりができました。ぼくは、とってもうれしい気持ちで思わず、

「やった。」

と大声でさけびました。いっしょに練習していたお父さんと弟も、え顔でよろこんでくれました。

ぼくは、お兄ちゃんとして心にきめていることがあります。それは、できないことでも、あきらめないで、ど力することです。ぼくの次の目ひょうは、二重とびです。まだ一回もとべません。さか上がりと同じように、練習をどんどんつみ重ねて、ぜったいにできるようにしたいです。

これからも弟は、ぼくにとって大切な家族で、ぜったいに負けたくないライバルです。これからも、弟といっしょにどんなこともののりこえていきたいです。

「なせばなる。」

奨励賞

お父さんの通しんひょう

日立市立水木（みずき）小学校　三年　木幡（こはた）　一葉（いちは）

明日から夏休み。

「ただいま。」

わたしはいきおいよくドアを開けて家に入った。

「おかえり、通しんひょうどうだった。」

と、お母さんが言った。わたしはランドセルの中から通しんひょうを出して、お母さんにわたした。

「がんばったね。」

そう言って、お母さんはとなりにいたお父さんにわたした。お父さんはいつも何も言わない。わたしは、

「先生に算数をもう少しがんばろうって言われたよ。」

と言った。

「大じょうぶ、大じょうぶ。」

お父さんと、お母さんはあまり気にしていないみたいだった。

わたしも気にせず、頭の中はおやつの事でいっぱいだった。すると、お父さんが茶色くよごれた通しんひょうを、わたしの白い通しんひょうのとなりにならべた。

見てみるとそれには三年二組お父さんの名前が書いてあった。

「えー。何であるのー。」

わたしは少しびっくりした。中を見ると、もう少しと×のしるしがたくさんついていた。

「ほら、大じょうぶでしょ。」

と、お父さんが言った。なぜか少しいばった顔をしていた。

わたしのお父さんは、いつもお仕事をがんばっていて、去年は一人で外国に行ってお仕事をしてきてすごいな。と思っていたけれど、子どものころは、べん強がにが手だったんだな。と思った。

その時わたしはいい事を思いついた。今のお父さんの通しんひょうを作ってあげよう。

まずべん強は、今もにが手みたいだからC。

つぎに運動はA。それは、きん肉ムキムキだし何でも出来るから。休みの日にはキャッチボールやバドミントンをしてくれるし、お母さんはすぐつかれた。って言うけれど、お父さんは一日遊んでも平気だから。

後、工作もA。ダンボールでいろいろ作ってくれるし、こわれた物を直してくれるから。

生活のようすは、いつもお酒をのんでいびきがうるさいから、○はあげられないと思った。

さい後にわたしからの一言。

お父さんがいつもお仕事に行く時ハイタッチしてくれると、今日も一日がんばろうという気分になれます。今のお父さんの通しんひょうはよいところがたくさんあると思います。おうえんしているので、この調子でがんばって下さい。

小学校　高学年の部
最優秀賞

悔しさの中で見つけたこと

石岡市立小幡（おばた）小学校　四年　北村（きたむら）　桃奈（ももな）

負けた瞬間、私は頭の中が真っ白になった。

「予選敗退だ、もう全国大会に行けない…。」

手足が冷たくなって手には汗をかいていた。涙が出てきたけど、私は大泣きしたい気持ちを必死でこらえた。私の介助についていた父が言った。

「結果を発表するまではわからない。まだ決まったわけじゃないよ。」

そう言われたので、私はまだあきらめないで決勝進出者の発表を待とうと思った。

オセロキャラバンの県大会、予選四戦目で私は負けた。三勝一敗。予選を通過し、決勝トーナメントに進めば、全国大会に行ける。私の目標は全国大会で八位入賞することだった。まさか、予選で負けるとは…。

予想外に相手の子は強かった。打ちたいところに打たせてもらえず、先をよんで打ったつもりが、相手はもっと先までよんでいて、苦しい対局だった。昨年の全国大会から一年、一生けん命がんばってきたのに。

結局、私は予選リーグ通過の二名に入れず、決勝には進めなかった。あの一敗で、全国大会への道が完全に絶たれた。もう何も考えられなかった。

大会が終わって、私の頭をなでながら母が言った。

「一年間、よくがんばったね。」

その瞬間、こらえていた思いが爆発し、涙がぼろぼろ出て止まらなくなった。言葉が出なかった。悲しくて悔しかった。私を車いすからおろして、抱きしめてくれ、母は言った。

「よくがんばったよね。遊びたいときにもがまんして、夜遅くまで練習して、ずっとがんばってきたね。桃奈は生活するだけでも大変なのに、健常者と同じようにオセロの大会に挑戦しているんだからすごいよね！前の生活からは考えられないよね！」

その言葉に、泣いていた私はハッとした。悲しいし、すごく悔しい。でも、大好きなオセロを、目標に向かって一生けん命がんばってこれたことは、すごいことだ。

私はせきずい性筋いしゅく症という難病で、首もすわらず、寝返りもできず、自分の力で動くことができない。呼吸

障害もあり、以前は入退院を繰り返していた。ぜんそくもあったので、救急外来に行くことも多かった。何日も痰に苦しめられて、たくさんの薬を飲み、吸入をし、呼吸器をつけ、生きるだけで精一杯の生活をしていた。その頃、私の楽しみは、なんとか動く右手でできる、ＤＳをやることくらいだった。

そんな私が、今では体調が安定し、やりたいことが見つかり、目標に向かって挑戦できるようになった。

しかし、私は手も自由に動かせないので、すべてのことに介助を必要とする。腕も動かせないので、自分で食べることもできず、本のページもめくれず、かゆいところもかけない。だから、介助があってはじめてやりたいことができる。私がオセロをやる時は、介助者に、オセロ盤の打ちたい所を言葉で伝えて、石を置いてもらい、返してもらう。両親をはじめ、ヘルパーさんや施設のスタッフが手伝ってくれて、やっとオセロの練習や勉強ができるのだ。そして、兄や祖父母、学校の先生や友達、周りの方々が、いつも私を応援してくれている。

そう考えたら、私はなんて幸せなんだろうと思った。体は不自由でもこんなに元気になり、周りの人に恵まれ、やりたいことができる。本当にありがたいなと思った。

今年、私は目標を達成できなかったけれど、その悔しさの中で見つけたことがある。それは、元気で好きなことに挑戦できることのありがたさと、支えてくれる周りの人たちのおかげで、私はがんばれるのだということ。その感謝の心をいつも忘れずに、また来年の大会まで、精一杯がんばって行こう！

◇

優秀賞

受けつがれる願い

龍ケ崎市立馴馬台（なれうまだい）小学校　五年　加藤（かとう）　らな

「おばあちゃん、この写真の人はだれ？」

「らなのひいおじいちゃん。戦争でなくなったんだよ。おばあちゃんが四才の時だから、ほとんど覚えていないのよ。」

「私のひいおじいちゃん…。」

それは、額に入った小さなセピア色の写真だった。おばあちゃんの家のぶつだんの上にかざられていて、今までも目にしていたが、そのことを聞くのは初めてだ。

「おばあちゃんも後になってから聞いた話なの。そろそろ、ら

なにも話をするね。」

当時はちょう兵制度というものがあり、健康しん断に合格したひいおじいちゃんは、戦地に送られて行ったそうだ。戦争に行くことが決まってから、写真館でさつえいしたのがこの写真だという。

ひいおじいちゃんの、少しきびしい目をしたこの表情。さつえいをする時、何を考えていたのだろう。奥さんと小さな娘に、もう会えなくなるかもしれないと考えていたのか。そんなひいおじいちゃんの気持ちを考えると、私は、胸の奥が苦しくなった。

ひいおばあちゃん（奥さん）は、おばあちゃん（娘）との写真を、戦地にいるひいおじいちゃんに、何度か手紙といっしょに送ったそうだが、返事が来たことはなかった。送った手紙が、届いていたのかさえも分からなかった。陸軍の歩兵隊に配ぞくされたこと以外は、どこの国にいるのかも分からなかったそうだ。

それが分かったのは数年後だった。県からひいおばあちゃんへ、木箱に入った死亡通知書が送られてきて、その中に、パプアニューギニアで戦死をしたと書かれていたのだ。

私はこの夏、原ばくの写真展や、テレビで終戦の特集番組を見た。身体の一部を失った人。食べ物が無く死んでいった人。黒くこげた人の山。私は、目をおおいたくなってしまった。それが、七十一年前まで日本で実際にあったことだ。そして今も、戦争の後いしょうで、多くの人達が苦しんでいる。

ひいおじいちゃんは戦場で、私が想像出来ないほど、おそろしく、苦しい思いをして死んでいったのだろうか。そしてとつ然、その通知を受け取ったひいおばあちゃんも、本当につらかっただろう。もし私のお父さんが、戦争に行くことになったとしたら…。

「そんなのいやだ！」

そう考えると涙が出てきた。戦争は、人の命や幸せを、全てうばってしまうものなのだ。

「もしかして、ひいおばあちゃんって、」

「本家のなくなったおばあちゃん。おそう式に行ったの覚えてる？」

家のアルバムで、私がいっしょに写っている写真を見たことがあった。その時のおばあちゃんと同じ、私が四才ごろの写真だ。

ひいおばあちゃんに死亡通知書が届いた時、い骨もい品も、何も残されなかった。もちろん生きていてほしい。でも、それがだめなら、せめてい骨を受け取りたかった。それが、ひ

いおばあちゃんの願いだったそうだ。

私は今、戦争のない平和な日本に生まれて生きている。当たり前のように思えるが、それは、ひいおじいちゃんや、当時の人達が、命がけで作った平和だ。ひいおじいちゃんからは、何も残されなかったそうだが、私は、ひいおじいちゃんは、命を残してくれたのだと思う。リレーでバトンを渡すように、おばあちゃん、おかあさん、私へと、命が受けつがれているのだ。

平和を守っていくことは、命を受けついで今を生きる、私達の責任だと思う。私も平和を守るために、何かをしなければならない。でも、正直に言うと、まだ私に何が出来るのか分からない。だから今は、心の中で平和を願い、受けつがれたこの命を、大切にしていこうと思う。

優秀賞

土の中のお宝

牛久市立牛久第二小学校　五年　寺澤　勇飛

今年の夏、ぼくはたくさんのセミが羽化する瞬間に出会った。それは、子供会のキャンプでの出来事だった。普段は「うるさいなぁ」とさえ思ってしまうセミだが、夜に青白い羽を乾かす姿はとても神秘的だった。地面にはセミの幼虫が出てきたと思われる穴がたくさん開いていた。そして、ぼくたちのテントはその横に広げられていた。「この下にも今夜出て来るはずだったセミがいたのかもしれない」と思うと、申し訳なくなった。日中はとても暑くて長時間外にいられないくらいだったが、夜になると空気がひんやりとしていて、みんなで夏の星座を探したりした。朝になると、昨晩羽化したばかりのセミ達が早速鳴き始めていた。

ぼくの家の近くでは、大きな道路の建設工事が着々と進んでいる。その道路が完成すると、もう一つの道での渋滞が少なくなって、人や車の流れがスムーズになるので完成を待ち望んでいる人がたくさんいると聞いた。工事が始まる前は草が生いしげった広い空き地だった。そこでは、たくさんの生

き物が生活していたに違いない。キャンプの時のように、数年ぶりに外にでようとしていたセミがいたのかもしれないし、モグラの家族が住んでいたのかもしれない。バッタやミミズ、トカゲ、ダンゴムシ、ぼくが名前も分からない生き物もたくさんいたはずだ。そう考えると、ぼくが知っている街の下に、ぼくの知らない世界が広がっているように感じた。

地面をアスファルトなどでおおうと、人間や車が通行するのにはとても都合がよくなる。でも、そればかりではないことも経験した。

引っ越してしまった友達に会いに、名古屋へ向かった時のことだ。ぼくが泊まったホテルの周辺には高層ビルが立ち並び、街に緑のある場所は見当たらなかった。夜になっても街の気温は下がらず、ずっと蒸し暑いままだった。ヒートアイランド現象という言葉を耳にしたことはあるが、実際に経験したのは初めてだった。テレビ塔から見下ろした街はキラキラ輝いていてとてもきれいだったけれど、外の空気は生温かく、キャンプの時と全く違う夜だった。

人間の生活を便利にするために、今までにたくさんの自然をぎせいにしてきたのかもしれない。でも、ぼくの祖母のように体の不自由な人にとっては、凸凹した道は不便だし危険だ。それから、暗い道より明るい道の方が安全で安心だ。整備された街はもう今の社会では手放せないものだ。でも、どんな街もその下には必ず土があるのだ。

ノーベル生理学・医学賞を受賞した大村智さんは、寄生虫が原因で起こる病気の薬となる微生物を土の中から発見したそうだ。土の中には、虫だけでなく、目には見えない微生物がたくさん存在している。そして、その微生物が計り知れない力を隠し持っているかと思うと、やはり自然の力はすごいと感心せずにはいられない。ぼくたちは、そんなお宝が眠っている上にフタをして生活していることを忘れてはならない。

◇

優秀賞

思いやりを乗せて走るバス

茨城大学教育学部附属小学校　六年　根本　桜樺

「あっ」

バスに響いた声で前を見ると、制服を着た高校生が倒れていました。バスを停めて声をかけた運転手さんの呼びかけにも

反応がなく、ただ時間だけが過ぎて行きます。近くにいた人が慌てて救急車を呼びましたが、サイレンが聞こえてくるまでの時間がとても長く感じられました。その後、救急車が到着し高校生は無事に運ばれ、私はいつものように最寄りのバス停で降りました。

学校へ着いて朝の用意が済んだころ、ふと朝のバスでの光景が思い浮かびました。倒れた高校生にかけ寄って何度も呼びかけていた人。衣服をゆるめて体を楽にさせていた人。名前は分からないけれど同じ高校だからと一緒に救急車へ乗っていった高校生。あの時、車内にいたたくさんの人が高校生のためにできることを必死で探していました。私は何をしたのだろう。そう考えたら見ていただけの自分が少し恥ずかしく、周りの人に何か手伝えないか聞くことができたら良かったと後悔しました。

幸いその高校生は暑さで具合が悪くなってしまっただけらしく、数日後にはいつものようにバスへ乗車してきました。目が合ったら笑顔になったので大丈夫で良かったと安心しました。

あの日のバスでの出来事から私はバスの中での考えが少し変わりました。平日、駅へ向かうバスはとても混んでいます。隣の人に押されたり荷物がぶつかったりすると邪魔だと思い、いらいらしていました。早く着けば良いのにと自分の都合ばかり考えていたけれど、今は周りの人へ優しい気持ちで接するようになりました。

高校生が倒れたあの時、バスの中には一人一人の周りを気づかう思いやりがありました。荷物を足下へ置いたり座席をつめたりととても小さなことだけれど、その小さな思いやりが満員のバスを毎日、無事目的地へ向かわせているのだと思えるようになったのです。

自分の見方を変えてバスの中を見渡すと、私と同じように荷物を移動させたり、次に乗る人のために空間を作っている人が大勢いることが分かりました。たまたま同じバスに乗っただけの名前も知らない人たちと、一人一人の小さな思いやりでつながっているからこそ毎日、安心して乗車できるのです。思いやりと言われると難しく考えてしまうけれど、少しでも相手の立場になって考えられれば、それが思いやりなのだと思います。毎日の中に小さな思いやりがたくさんあふれていて、その中で生活できることはとても幸せだと思えるようになりました。

まだまだバスでの通学は続きます。知らない人に話しかけ

たりするのは勇気がいるけれど、もしも困っている人がいたら今度は見ているだけでなく、かけ寄って声をかけられる人になりたいです。バスの中に広がる思いやりの輪がもっと大きくなるように、これからはもっと相手のことを考えて行動したいと思います。

あの日の出来事は私に、日常にあふれるたくさんの思いやりを教えてくれるきっかけになりました。

◇

優秀賞

おもいやり

神栖市立息栖小学校　六年　遠藤　智蔵

寝たきりで車いすに乗っている子、頭に器具を装着している子、普通に見えるけれどきっと重い病気を抱えている子。僕は半年に一度、こども病院へ行く。病気を抱える妹の通院に付き合うためだ。

僕が初めてこども病院に来たのは五歳の時。最初はその光景に驚くばかりだった。当時の僕は、いわゆる普通のこどもしか見たことがなかったからだ。なんであの子は寝たきりなんだろう。なんであの子はあんなに分厚い眼鏡をかけているのだろう。あの子が頭に付けているのは何？頭の中は、疑問だらけだった。

そして、僕は年齢を重ねるごとに、気づいていった。世の中には、病気や障害をもっている子供がたくさんいるということ。そして、それを支える家族の存在があるということに。僕らがこうして生まれてくることは奇跡なのだ。そして、健康でいられることは何よりもありがたいことなのだ。だから、病気や障害のある人に、差別やいじめをせずに、「おもいやり」のこころをもって、接していこうと思った。

でも、考えた。「おもいやり」を行動で表すにはどうしたらいいのだろう。僕にできる「おもいやり」とは、いったい何だろう。

僕は、自分が小さいころ、こども病院のプレイルームで待つ時間がとても長いのが苦痛だった。こども病院は大きい病院だからいつも混んでいるし、妹の検査や診察は、いつも五時間ぐらい時間がかかるのだ。ゲームをしていても、飽きてしまう。本を読んでも、飽きてしまう。そんな時、ボランティアの大学生のお兄さんが、僕とゲームの話をしてくれたのを

思い出した。そうか。僕にできる「おもいやり」を、これで実行しよう。

今年の夏休みも、こども病院は混んでいた。プレイルームもたくさんの子供たちで混んでいた。

「ここで、診察の間待っていてね。」

とあるお母さんが、病気の子供を抱っこして小さな男の子をプレイルームに残して診察室に行ってしまった。僕は、その男の子に思い切って話しかけてみた。

「いっしょにブロックしない？」

「うん！」

男の子は、すごくうれしそうに僕に返事をしてくれた。僕は、夢中になってその男の子とブロックで遊んだ。しばらくすると、男の子のお母さんが戻ってきて、僕に向かってこう言ってくれた。

「楽しそうだね。お兄ちゃんが遊んでくれたの？ありがとうね。今からレントゲンに行くんだけど、もう少しだけお兄ちゃんにこの子を願いしてもいいかな？」

「はい、大丈夫です！」

僕は笑顔でそう答えた。

僕にできる「おもいやり」。病気の兄弟を持つこどもの気持ちがわかるから、僕にはこれができると思った。プレイルームで子供たちと遊んであげること。これなら、僕にもできる「おもいやり」だ。これでこども病院で過ごす苦痛な時間が、楽しくなればいいと思ったのだ。

妹の病気をきっかけに、僕はとても貴重な経験をしている。きっとそうでなかったら、僕は健康なことが当たり前だと思っていただろう。そして病気を抱えるこどもたちの存在を知らずに大きくなっていたことだろう。僕はこれからも「おもいやり」の気持ちを持つだけでなく、僕に与えられた境遇で「おもいやり」を行動に表していきたいと思う。

---◇---

優秀賞

初めて被災者となって

常総市立大生（おおの）小学校　六年　大野（おおの）　太聖（たいせい）

「太聖、ランドセルと着替えを持って。ひなんするよ。」

お父さんが決断したようにぼくに言った。

昨年の九月、ぼくは被災者となった。関東東北豪雨により、

降りやまない雨。そして、休校。テレビでは、近くの鬼怒川が氾らんして、大量のどろ水が流れている現状を映し出していた。「常総市が大変なことになっているじゃないか。」ぼくや家族は、他人事のようにテレビを見ていた。ぼくの家は小貝川の近くなので、まだ大丈夫だと、安心していたのだった。

しかし夕方になって、となりの地区まで浸水しているとの情報が入ってきた。そこでぼくたち家族はお父さんの一言で避難することに決めたのだった。ありがたいことに、近くに親せきの家があったので、しばらく避難させてもらうことになった。

次の日、みんなで家を見に行った。目に飛び込んできたのは、通い慣れた道路が水で埋まり、たくさんの家が水につかっている現状だった。「自分の家は大丈夫だろうか。」ぼくは、胸がいっぱいだった。水が多すぎて家の近くまで行けず、はなれた所で確認できたのは、どろ水につかっている自宅だった。ぼくも家族も何もできなかった。

水が引き、そうじに行った時のしょうげきは、忘れられない。トイレのマンホールのふたが庭に落ちていたこと、収穫したばかりの米が水につかり、とてつもない臭いを放っていたこと、野菜が木の上にのっていたこと、家の中の臭い。家族みんなでがっかりしてしまった。

それでも手伝いに来てくれた人は、何日も何日も片づけとそうじをしに通ってくれた。そして、

「食べなきゃだめだよ。」

と言って、ご飯の用意もしてくれた。今の家の修復がすんで、この家でくらせているのは、その方々のおかげだ。忘れてはいけない。

ぼくが通う大生小学校も、たくさんの水につかってしまった。小学校も大変だったのに、先生が、よく連絡をとってくださったので、「早く学校が始まらないかな。」と元気になった。

学校再開と同時にぼくたちは、近くの五箇小学校にバスで通うことになった。どちらの学校も大きい学校ではないので、ぼくのクラスは大生小が二十一人、五箇小が十五人、合わせて三十六人のクラスになった。授業では、理科の実験をしたり、体育でドッジボールをしたり、野球をしたりと今まで大人数でできなかったことができて、とても楽しい思い出になった。クラスに担任の先生が二人いることも楽しかった。今は大生小にもどることができたが、受け入れてくれた五箇小の先生や友達には感謝の気持ちでいっぱいだ。

ぼくは、学童野球をしていたが、その練習のグラウンドも

水につかってしまった。グラウンドの水が引いた時、かんとくは真っ先にグラウンドにかけつけてくださった。卒業した中学生やお父さん達も集まり、グラウンドには分厚いどろがたまっていたが、一輪車で何度も何度も運んでどろをとったそうだ。かんとくは、ぼくのポジションでグラウンドの真ん中にあるマウンドも直してくださった。十一月に練習を再開できたのは、助けてくださったみなさんのおかげなのだ。

ぼくは、被災者となって、本当にいろいろな方々の助けがあって今があることを実感している。ボランティアの方、自衛隊の方、遠くから励ましの手紙や支援物資を送ってくださった方、本当に感謝したい。そして災害によって家や家族を失った方、心に傷を負った方のために、今度は、ぼくが助けてあげたいと思った。ぼくが通う小学校もまだ工事中だが、六年生として大生小を代表して、頑張っているすがたをみんなに見せたいと思った。

奨励賞

少しの勇気

守谷市立郷州（ごうしゅう）小学校　四年　鈴木（すずき）　ゆいね

「ゆいねちゃんの声をあまり聞いたことがないんです。」

ようち園のころから毎年個人面談では、たんにんの先生にはこう言われてきました。私だって、みんなの前で手を挙げて大きな声で発表したいし、自分から、先生に笑顔であいさつがしたいし、昨日あった出来事を話したい。でも、

「まちがえたらどうしよう。恥ずかしいから私には出きないな、言わなくても伝わっているよね。」

と、自分の心にふたをして「思い」を声にせず心にしまいこんでいました。心の中の私は、とてもおしゃべりです。

今年の夏、私は、日本、中国、かん国の子ども達が中国に集まり、皆で絵本を作るという事業に参加しました。参加する前はとても不安でした。初めて会う人たち。ましてや、中国やかん国の人たちに思いを伝えるなんて。絵本をいっしょに作っていくなんて。

一週間という私にとって長い期間、家族や日本をはなれ、絵本作りに挑せんしました。何度も何度も勇気が必要でし

た。話しかける時、心ぞうがバクバクしていました。もじもじしていては何もできません。両手はあせをかいていました。自分の思いを声に出して伝えなければ、何も相手に伝わらないのです。私は必死でした。私は今までこんなこと言わなくても伝わっているだろう、分かってもらえるだろうと勝手に思いこんで声に出して伝えることからにげていました。でも、この交流会で気付いたんです。思っているだけではダメなこと。伝えたいっていう気持ちが大切で、一生けんめい自分の思いを伝えなければ相手に伝わらないということを。私は、言葉というのは、心と心をつなぐ大切な道具だと感じました。言葉がすべてではないが自分の思いをりかいしてもらいたいときは、心の声を言葉にしていく大切さを学びました。

そして、一週間の旅で国をこえたたくさんの友達ができました。日本語が上手な子とは、たくさんの話ができました。けれど、言葉では通じない時もあるので、通やくさんの力もかりながら、身ぶり、手ぶりで思いを伝えました。かん国のすごろくや、中国のゲームをいっしょにやったりもしました。名しや電話番号も交かんしました。話す言葉はちがっても、心と心を通じることができた仲間もいました。私にとっては、わすれられない一週間となりました。

「なんだか大人になった気がするね。」

と、絵本作りから帰ってきた私にお父さんが言いました。すこしてれくさかったけれど、うれしかったです。ちょっと前までのもじもじしていた私より少し前に進めたような気がします。絵本作りはとても苦労したけれど、世界に一つだけの、私の宝物ができあがりました。絵本は今、教室で光り輝いています。そして、これからも自分の気持ちを自分の言葉で伝えていきたい。少しの勇気を出して。

---◇---

奨励賞

おもいやり

下妻市立大宝（だいほう）小学校　四年　髙田（たかだ）　大馳（たいち）

学校の帰り道、家の近くまで来ると、

「ピーピピピピー。」

と、口ぶえが聞こえてくる。

（あ、またばあちゃん口ぶえをふいてるな）と、ぼくが走って家に帰ると、ばあちゃんが楽しそうに口ぶえをふきながら、

花の水やりをしていた。あんまり楽しそうだから、ただいまを言わないで、そっと、えん台にすわって、ばあちゃんを見ていたら、
「あら、大ちくんおかえり。帰ってたの、ばあちゃん気づかなかったよ。わっはっはっ。」
と、おどろきながら大笑いをしてぼくを出むかえてくれた。
そして、
「大ちくん、えん台の所の野さいをせんたく機にいれといて。」
と、時どきおかしな事をたのむから、
「ばあちゃん、冷ぞう庫でしょ。」
と、ぼくが教えると、
「そうだな。ごめん。わっはっはっ。」
と、また大笑いをする。
　ぼくのばあちゃんは、明るくて楽しい。でもばあちゃんは、こ間せつだっきゅうで、足が痛いから、つえをついて歩いている。だから、地区のお知らせ配りや、近所へのおつかいは、ぼくが手伝う。
　昨日、庭で野球のすぶりをしていたら、
「う、いてててて。」
と、小さな声が聞こえた。びっくりしてふり向くと、ばあちゃんが庭で転んでいた。ドキドキしながら走ってばあちゃんの所に行くと、痛いのをぐっとがまんしていた。ぼくが、
「大じょうぶ?ばあちゃん。」
と聞くと、痛いのをがまんして立とうとしているから、支えようとしたけど、ぼくだけではむ理だった。ばあちゃんを助けられなくて泣きそうになった。ばあちゃんは、
「大じょうぶ、大じょうぶ。」
と、ぼくを安心させてくれた。
　ぼくは（自分が他に出来る事ないかな。）と思って、家に入ってざぶとんを持って来て、ばあちゃんの顔の下にしいた。ばあちゃんの顔やかみの毛に土や葉っぱがついて、よごれていたから。ばあちゃんに、
「ありがとう、大ちくん。やさしいなあ。ばあちゃん、うれしいよ。」
と言われて、ぼくは、学校の友達や野球チームのみんなが、ぼくがこまっている時に助けてくれた事を思い出した。今日のぼくと同じ気持ちだと思った。ぼくは転んだままのばあちゃんが、かわいそうになって、ばあちゃんのとなりにすわった。ばあちゃんはいつも、おやつを作って待っててくれたり、学校の話をたくさん聞いてくれてやさしいから（もっとばあちゃ

んに、やさしくしてあげたいな。）と思った。
　お母さんが会社から帰って来た。（よかった。）って少しホッとした。お母さんは、ばあちゃんが庭で転んでいるからびっくりして、心配そうに走って来て、ばあちゃんに、
「痛い？これなら大じょうぶ？。」
と、ばあちゃんに聞きながら、ばあちゃんを起こそうとした。そして、
「大ち、手伝って。」
と、ぼくの力も必要だから（今度こそ、ばあちゃんを助けるぞ。）と、うでと、足に力をいっぱい入れてお母さんといっしょにばあちゃんを支えた。ばあちゃんが、やっと立ち上がれると、お母さんは、ほっとした顔で、
「大ち、ありがとう。本当に助かったよ。」
と、言ってくれた。ぼくは、ほめられて、し合でヒットを打てた時みたく、うれしくて、いい気持ちだった。ばあちゃんにつえをわたすと、ゆっくり一歩ずつ歩けた。ぼくが、
「あ！歩けた！」
と喜ぶと、ばあちゃんは、ま女のマネをして、
「まほうのつえだぞ、イヒヒヒヒ。」
と言うから、今度は、ぼくがばあちゃんみたく、大笑いしてしまった。

◇

奨励賞

みんなの笑顔を見るために

ひたちなか市立津田（つだ）小学校　五年　大宮（おおみや）　夏輝（なつき）

　ぼくの夢はエンジニアになって、医りょう機器や福祉ロボットを作り、人を助けることです。
　ぼくの父と母は福祉の仕事をしていて、小さいときから、病気やしょうがいを持っている人と会うことが多く、いつかは自分も、人を助ける仕事をしたかったから、この仕事につきたいと思いました。
　また、福祉のイベントに行ったときに、福祉機器を見たり、実際に体験したりもしました。病気や身体の不自由な人を介護する仕事の人や家族は、身体に大きな負担がかかります。その負担を少しでもなくし、無理なく介護していけるような機械もあることを知り、おどろきました。
　また、医りょうの現場では、機械が人ではわからない病気

を発見したり、実際に治りょうをしたりしているのをテレビで見たことがあります。人を助ける福祉の気持ちと、ぼくの興味のあるロボットや機械が一つになって人を助けることができたらいいと思います。

ぼくのおばあちゃんは、週三回人工とうせきを行なっています。また、おばあちゃんは軽いにん知しょうをわずらっていて、週三回デイサービスにも通っています。人工とうせきとは、特しゅなそう置を使い、人の血液を体外に出してから血液をキレイにして再度体内にもどすという治りょう法です。これを開発した人はすごいと思います。それによって、多くの人が救われたのだと思います。それでも四時間かかり、大きな病院でしかできないので、家でもできる、小さな機械になればいいのにと思います。そうすれば、ねている時にもできて便利だと思います。

また、おばあちゃんの行っているデイサービスセンターでは、動かずに入れるお風呂や、車いすのまま乗れる車両があるそうです。そうした工夫が、お年よりや介護をする人に役立っているのだと思います。

ぼくがエンジニアになって、発明するのならば脳の動きや感情を読み取って、言葉や文字にして表したり、動かない身体を動かす機械を作りたいです。そして、治ゆ機能を持つようなロボットを開発して、病院に行けない人や医師が少ない地域に送って、人を助けることができたらいいと思います。

そのために、ぼくは今勉強をがんばっています。エンジニアになってロボットや機械をつくるためには、知識も必要だからです。

そして、社会の動きや情報を知ることも必要です。なによりも大切なことは、人の気持ちがわかることです。毎日の生活の中で困っている人達を助け、人の気持ちを知ったり共有したりすることが、とても大事だと思うので、人を助けるように努力しています。

みんなの笑顔を見るために、そしてなによりも、みんなを幸せにするためにも、毎日努力していき、いつかは人に役立つロボットや機械をつくりたいです。

奨励賞

通じ合うために

つくば市立光輝学園松代小学校　六年　西岡　美咲

私の将来の夢は、通訳者になることです。

中国語の通訳者を目指していて、少しずつ勉強しています。

何故中国語なのかというと、ニュースや新聞等で、中国の人が悪い行いをしたということが流されていたとき、いろいろなところで「また中国が」や「中国がきらい」と聞いて、とても悲しくなったからです。

確かに、悪い行いをする中国の人は、います。ですが、それだけで中国全体をきらうというのはどうかと思いました。

私の母の知り合いにも中国人の方がいます。その方は震災のとき、近所の人の分の食べ物も買ってきてくれるような優しい人だと言っていました。こういった日本にいる中国人の方々が、日本人の勝手な中国ぎらいのせいで日本に居づらくなったらと考えると、とてもむねがいたみました。

中国はとても広い国です。そして四千年という長い歴史と、すばらしい文化を持っています。その中の一部の情報だけを見て、「中国」を決めつけるのは、日本の犯罪だけを見て「日本はこわい国なんだ」と言われるのと同じようなものです。

私だったらこんなことを言われたらもっとこの国の良い所を知ってもらいたい、教えたい、と思います。もしかしたら、中国にも同じことを思っている人がいるかもしれません。

ですが、中国と日本では言葉がちがうので、伝えたいことを伝えることができません。

でも、そこで私が通訳をすれば、中国の人の想いをとどけられるのでないかと考えました。

もう一つ理由があります。

語学は楽しいからです。

単語を一つ覚えたり、文のつくり方を学んだりするたび、知識が増えていく感覚がするからです。

また、テレビや本などで中国語を見かけた時に、少し理解できるとうれしいからです。

今まで解けなかった問題や、まったく理解できなかった物がわかった時の喜びや感動に似ていると思います。

中国や日本の他にも、世界にはたくさんの国があります。そして、その国一つ一つに個性があります。

イタリアにはおいしい食べ物だけでなく、たくさんの世界遺産があったり、ロシアには実は広大なひまわり畑があって、

国花になるほどだったり、イギリスのユニオンジャックのもとになった四つの国旗には、それぞれ人名のようなものがついていたり。

国について調べるたびに、おもしろいことや、不思議なことが山のように出てきます。

いろいろな国の言葉を覚えて、その国のよさを少しでも多くの人々に伝えて、人々が交流するきっかけをつくる。

世界の人々が互いにわかり合うことに少しでも貢献できるような通訳者に私はなりたいです。

◇

奨励賞

おもいやり

つくばみらい市立谷井田小学校　六年　深作　桔平

今年の夏休み、ぼくは市の福祉協議会で開催されたワークキャンプに参加してきました。

市内の小学校・中学校から集まった、初めて会う人達と班分けをして一泊二日のキャンプをします。ぼくは二班の班長になりました。

まず最初に近くの保育所に行き、小さい子達との触れ合いをしました。小さい子はわがままでやんちゃなところがありましたが、みんな素直だったのでケンカにならないように楽しみながら一緒に遊びました。

保育所の訪問の次はぼく達が宿泊する「中央青年の家」に行き、班ごとに分かれ夕飯のカレー作りです。役割分担をしてみんなで協力してできるように気をつけました。夕飯の後にお風呂へ行く時も何をするにも整列をさせるのが班長の役割だったのだけど、いつも決まった子が話を聞いていなかったりして、困ってしまいました。困っていたら他のメンバーも協力して声をかけてくれて、どうにか班で行動することができました。

次の日は「老人ホーム」を訪問しました。老人ホームには認知症など、いろいろな疾患を持った方がいます。ぼくの妹は産まれながらの重度心臓病で同じように疾患があります。老人ホームにいる一人一人の方々の状態や気持ちを考えてお手伝いをする仕事をしているスタッフの人たちを見て、グループのみんなが班長だけに任せないで協力してくれたことも「おもいやり」だなぁと思いました。

ぼくがこのワークキャンプに参加する前に神奈川県相模原市の重度障害者施設での無差別な殺傷事件がありました。今回このワークキャンプに参加して、モノを忘れてしまった認知症の方も、話が出来ない色々な疾患の方も、妹のようなまだ小さくて、うまく気持ちを伝えられない子も、例え上手に表現が出来なくてもみんなそれぞれに「大切な気持ち」があることを絶対に忘れてはいけないと思いました。

少し前、母は妹を連れて買い物に行って車を駐車する時に、とても暑い日で駐車スペースもたくさん空いていたので障害者スペースに停めました。もちろん市から支給された障害者マークを提示してましたが、車を降りる際見知らぬ老人夫婦に「ずいぶん元気な障害者だな！」と障害者スペースに停めた事について文句を言われたそうです。今は元気に見えても産まれてから何度も何度も大きな手術を乗り越えてきたのに…胸やお腹、首にもたくさんの消えない大きな傷あとだらけの妹を見て、その話を聞いて「障害者は元気に見えちゃいけないのか」とぼくはとても悲しくなりました。

世の中には近いからとか、楽だからという理由で障害者スペースに駐車する人もいるかもしれません。でも周りには分からないだけで何かの病気やケガと闘っている人かもしれません。「元気に見えるけど、どこか調子悪いのかな?」と思える人になりたいです。そう思うことが出来れば「何か困っていたら助けてあげよう」「自分のできることはあるかな」と考えることが出来ると思います。

ほんの少しの「おもいやり」を持つか持たないか。それだけで人を喜ばせたり、悲しませたりしてしまうことをいつも考えられるようになりたいです。一つの同じ言葉を言う時も、相手の気持ちを考えた言い方ができるように気をつけたいと思いました。

「おもいやり」はお年寄りにも子供にも、どんな人にも必要です。動物にも必要です。自分の意見もしっかり持ちながら、誰に対しても「おもいやり」という優しい心をもてるように心がけていきたいです。

中学校の部
最優秀賞

我が家のちょっと変わった伝統行事

かすみがうら市立霞ヶ浦中学校　一年　仲澤　美穂

夏休みの風物詩といえば、お盆である。私が過ごしてきた夏休みは、両親が共働きで、兄二人も部活で不在だった。そのような家庭に育った私にとって、お盆は、家族や親せきが全員そろって過ごす、楽しい行事のひとつである。

お盆は、先祖の霊などを家に迎えて供養する行事である。私が住んでいるかすみがうら市では、八月に入るとお墓をきれいに掃除する。この時期になると、決まって母は、

「八月一日の朝に、あの世の門が開いて、仏様がお盆までに着くようにと、みんなで出かけてくるのよ。」

と説明する。

そして、十三日の朝に、さまざまな飾りやお供え物を準備する。夕方には、お墓の入り口まで仏様を迎えに行き、提灯を灯す。我が家では、仏様が道に迷わずに家に来られるようにと、家長の妻、つまり母が、お線香を道に立てながら家に案内する。お線香の束は、夏の夜の風に吹かれ、すぐに火がついてしまう。熱いと騒ぎながら、お線香を立てていく母の姿は、毎年恒例の光景である。

このようにして、我が家のお盆は始まる。大学生になった兄は、夏休みを利用して帰省し、地元の友人と遊ぶ。しかし、迎え盆と送り盆には、必ず家に帰ってくる。友人と遊んでいる途中でも、いったん家に帰ってくるのだ。この行為は、兄だけでなく、地元の友人がみんな行っているという、少し面白い習慣である。

こんな我が家のお盆には、もう一つ、ちょっと変わった習慣がある。それは、迎え盆を終えると、仏様の前に集まり、お茶を飲みながらワカサギを食べることだ。ワカサギを食べることができるのは、「にしんもち」の人だけだ。つまり、二親がそろっている者だけが食べることが許される。両親がそろっている子供たちが食べることになる。

私にとっては当たり前の行為であるが、この行為が他の家にはなかった。実は、父も結婚するまで知らなかったという。聞くと、母の実家での習慣だった。母が生まれ育ったところと嫁いだ我が家は、同じ中学校区である。それにも関わらず、違った習慣があるのだ。

お盆の間は、殺傷をしてはいけないという仏教のしきたり

に習って、野菜を中心に食事をする。一日三回、仏様にお供えし、それと同じものを家族もいただく。魚や肉を食べないという習慣の中で、育ち盛りの子供たちに魚を食べさせるために、考え出されたものだったのかもしれない。また、カルシウムが豊富で、地元名産のワカサギをニシンに見立て、ニシンの代わりとして、食べさせるための先人たちの知恵だったのかもしれない。

仏様の前で家族がそろい、お茶を飲みながら、ワカサギを頭から小さく食べる。この時にしか口にしないワカサギは、塩っ辛く生臭い。しかし、毎年口にする味だ。

家族の団らんは、日常の私たちの話から始まり、両親の子供のころの話にさかのぼる。そして、祖父の若いころの話や仏様が生きていたころの話になるのがお決まりだ。楽しかったことや生活が苦しかった戦争時代のことなど、普段のことから歴史の教科書に出てくるようなことまで話す。お線香の香りに包まれながら、穏やかなひとときを過ごしていく。ふと、私の隣には、遺影でしか見たことがないひいおじいちゃんが、笑いながら一緒に座って、話を聞いているような気にまでになる。

仏様を身近に感じることができるお盆は短く、あっという間に送り盆になる。迎え盆とは逆に、仏壇のろうそくから提灯に灯を移し、お線香を立てながら、お墓の入り口まで仏様を送る。そして、父は毎年決まって、

「お粗末様でした。こりずに、来年もまたお越しください。」

とあいさつをして、提灯の火を消す。なぜかさみしい気持ちと、心がほんわかと温まるような感じがする。

それぞれの土地に、さまざまな習慣や行事がある。そして、それらの習慣や行事には、行うための目的や意味がある。便利で楽しく遊べるものがあふれている現代では、このような習慣などは面倒に感じることも多いだろう。また、不必要ではないかと思ってしまうこともある。しかし、それは間違っている考えのように思う。我が家のお盆のように、先祖が歩んできた道を振り返ることで、今の私の存在を考える機会を与えてくれている。

私は、これからも学生としての忙しい時間を過ごしていくだろう。そのような生活の中でも、ゆっくりとした時間の流れを感じながら、時に立ち止まり、振り返り、そして前に進んでいきたい。そのためにも、先人たちが築き上げた習慣や文化を大切にし、次の時代に、きちんと伝えていけるような人物になりたい。

優秀賞

母と私の絆「ありがとう」

日立市立平沢中学校　一年　原　寧々

「寧々なら出来る！頑張れ！」

いつも私の背中を押してくれる母の言葉だ。私が、落ち込んでいる時、自信をなくしかけた時には、いつも、母のその言葉が魔法のように私の心を動かしてくれる。

母は、私が一歳の時に離婚をし、母一人で私を育ててくれた。夏休みには旅行に行ったり、学校の行事にはすべて来てくれた。私は今まで父親のいない生活に全くと言っていいほど、不自由を感じたことがなかった。母はいつも黙って、母親と父親という二つの役割を背負っていてくれているのだと思う。

そんな母は、私が一番尊敬している人だ。母は、仕事から帰ってきて疲れていても、私に笑顔で話しかけてくれる。私が学校で悩んでいることがあれば、一緒に悩んで相談にのってくれるとても頼れる母である。

私は、母によく聞くことがある。それは、

「世界で一番、大切なものって何？」

そうすると、必ず母の答えは、

「寧々が、世界で一番の宝物。当然！」

と言ってくれる。この言葉を聞くと、私はいつも、心がふわふわと温かくなり、やっぱり寧々のお母さんは最高だな、と思う。

中学生になり、アルトサックスが吹きたくて、憧れの吹奏楽部に入部したばかりのことだった。運命のパート決めの日、私は、希望していなかったバリトンサックスになった。私は、涙も出ないほど魂の抜けた状態になった。部活の練習は続けたものの、少しも身に入らなかった。もう、部活をやめてしまいたいと、母に相談したこともあった。しかし、そんな時も必ず、笑顔で「寧々なら出来る！バリトンサックスを吹いている寧々の姿を見たいな。」と言ってくれた。私は、母の言葉の魔法にかかり、また、母の笑顔で私の心は動かされたのを覚えている。そんな私は、バリトンサックスが上達するよう、希望に燃えて頑張って練習している。

私に夢を与えてくれたのも母である。母は看護師をしている。私は、仕事をする母を初めて見た時、ものすごく誇らしい気持ちになった。患者さんに対して笑顔で優しく接していたり、難しそうな機械を使いこなしている母がとても格好良く見えた。それから、私は母のような看護師を目指すように

なり、夢の実現に向けて勉強を続けている。
　このように、私の中での母はとても大きな存在である。母の子どもでなかったら出来ないこともたくさんあったし、バリトンサックスも続けていなかったし、この看護師になりたいという夢も持っていなかったのではないかと思う。
　私が今ここにいるのは、母のおかげだ。命を与えてくれたことはもちろんであるが、私の中に言葉や笑顔などの母の思いがたくさんある。この思いが、どんな時も私を勇気付け、励ましてくれる。
「寧々なら何でも出来る！大丈夫！」
この言葉は、薄っぺらな、適当な励ましの言葉ではなく、母の愛情なのだと思う。つらいことがあったとしても、母とだったら乗り越えられると私は思っている。
　今、心から母に「ありがとう」と伝えたい。だけど、この言葉を私は素直に言うことが出来ない。いざ、言おうとすると、恥ずかしくって、とても小さな声になってしまう。
　母の言葉で励まされ、とても嬉しい気持ちになったことが、数え切れないくらいある。だから、私は、母を笑顔に出来る「ありがとう」という言葉を大きな声で、たくさん伝えたいと思う。もちろん、この言葉を言うのは照れくさいが、勇気を出して言いたい。いつも感じている感謝の気持ちを、素直に言うことは、母に対する小さな恩返しであると私は考える。
　私の「ありがとう」という言葉が、母にとっての魔法の言葉になってくれたら、私はとても嬉しい。そして、家の中にもっともっとたくさんの母と私の笑顔があふれたら、どんなに素晴らしいだろう。
　「ありがとう」というたった一つの言葉が心と心を結ぶとても大切な役割をしているのだ、ということを私は忘れないようにしていきたいと思う。
　家族とは、切っても切れない絆で結ばれている深いつながりだと思う。だから、どんな時でも私の味方でいてくれる母の存在こそが、私と母の絆を強くしてくれているのだろう。
　私は、母が大好きだ。今の生活が楽しくて幸せだ。こんなに私を幸せに育ててくれる母に、大きな声で、
「ありがとう！お母さん！」
と伝えたい。この気持ちで、いっぱい親孝行をしていきたいと思う。私の気持ちがいっぱいつまった魔法の言葉で、母が、いつまでも笑顔でいられますように…。

優秀賞

吃音と兄

日立市立台原中学校　一年　高橋　彩都

いつも楽しいはずの夕食の時間が、一転しました。それはお兄ちゃんの話し方がおかしくて、僕が笑ってしまったからです。お兄ちゃんは、ご飯を食べるのを途中でやめて自分の部屋に入ってしまいました。僕は何がおこったのかよくわかりませんでした。お母さんが食事の後に僕を呼んで、

「この本の中にお母さんとお兄ちゃんの思いが書いてあるから読んでごらん。」

と、一冊の本を手渡してくれました。

本には、お兄ちゃんの話し方は「吃音」といって、どもったり言葉がつまったりすること、世界の百人に一人ぐらいの人が吃音であり、まだ研究中で原因がはっきりしていないということがわかりました。そしてお兄ちゃんも本の中に登場する新一と同じように、小学三年生から週に一度、ことばの教室に通っていたことを思い出しました。ことばの教室は、トランポリンやボールのプール、オセロなど楽しいものがたくさんある教室でした。お兄ちゃんを迎えに行く時、僕はお母さんに「僕も一緒に遊びたい。」と言ったことがありました。その時、お母さんは少し困った顔をしていました。今思えば楽しそうに遊んで見えたのも実は、自分の気持ちや考え方、意見などを相手に表現し、伝えるために必要なものだったのだと思いました。

新一のお母さんが、

「ずっと…かわいそうだって…思っていたの。」と、新一に自分の心情を語っていました。僕はお母さんが本を渡してくれた時「お母さんの思いが書いてある。」と言っていたので、その思いを聞いてみました。お母さんもお兄ちゃんがどもってしまうのは「自分のせい」だと自分自身を責めていたそうです。でもこの本を読んで「自分と同じ気持ちで子供に接している人がいる」ということがわかり、心が救われたそうです。そして周りの人に吃音のことをかくしたりせず、みんなに正しく吃音について理解してもらえるように努力し、お兄ちゃんの良い所をたくさん見つけることにしたそうです。

僕もお兄ちゃんの良い所を知っています。僕は今年、お兄ちゃんと同じ中学を受験しました。僕は塾には行かず、自分の力だけで挑戦しようと思いました。そんな時お兄ちゃんが、

「わからない所があったら教えてあげるからね。頑張って一緒

の学校に通おう。」
と、言ってくれました。自分の勉強や部活で急がしいのに、僕のために時間を割いてくれました。僕は期待に応えようと頑張りましたが、残念な結果に終わりました。僕は心の中で、「お兄ちゃんにバカにされるかな。」と思っていました。お兄ちゃんに、
「だめだったよ。」
と、言うとお兄ちゃんは、
「彩都は頑張ったよ。よくやった。」
と肩を抱いてなぐさめてくれました。僕はお兄ちゃんの期待に応えられなかったくやしさと、僕の頑張りを認めてくれたやさしさに涙が出そうになりました。お兄ちゃんは僕の知らないところで吃音と戦い、苦しみを味わってきました。だからこそ、人の痛みや悲しみが自分のことのようにわかるのだと思います。そしてお兄ちゃんはいつも人の話にきちんと耳を傾け、誰かが失敗しても笑ったりしないのだと思いました。
　今回僕は思いきってお兄ちゃんに吃音について聞いてみました。お兄ちゃんは中学生になった今でも、新一と同じように学校でまねをされたり、笑われたりすることがあるそうです。小学生の時は自分なりに吃音について考えて友達に説明したけれど、なかなか理解されずくやしい思いをしたそうです。「どうして自分だけが…。」と悩み苦しんだこともあったと話してくれました。でも吃音を自分の個性として受け止められるようになってからは、いじけたり、クヨクヨしたりしないで、自分が今できることを精一杯頑張ろうと決めたそうです。僕はお兄ちゃんの話を聞いて、小さい頃からつらい思いをしていたこと、吃音について正しい知識を持たず笑って心を傷つけてしまったことを後悔し、反省しました。
　新一がお母さんの思いを知った時の言葉に
「大事な人の悲しみや苦しみを知らないでいるよりも知っておく方がいい。それはとてもつらいことかもしれないけど、でも、それはとても大切なことのように思える。」
とありました。僕もお兄ちゃんの苦しみや思いを少しでも知ることができてよかったと思います。知っていれば、ひとりで悩んだりせず何か手助けできるかもしれないからです。もしこれからお兄ちゃんがどもることで困ったことやしんどいことがあった時、僕はお兄ちゃんに寄り添い、一緒に考え、力になってあげたいと思っています。

優秀賞

平和大使として

石岡市立石岡中学校　二年　杉嶋　茜里

私は、平和大使として八月五日から七日の間、広島で戦争について学んできました。

広島に行くにあたって二つの目的を立てました。一つ目は、祖父の話す戦争をこの目で確かめる。私は幼い頃から祖父の戦争体験について聞かされてきましたが、幼かった私には全くと言っていいほど理解できていませんでした。戦争のもたらした被害は原子爆弾が墜ちた広島に行ってみなくては分からないと思いました。広島で見聞したことをもとに祖父の話をもう一度聞いてみたいと思ったからです。

二つ目は、広島に行くことで大きな経験を得られると思ったからです。原子爆弾が投下された八月六日、テレビでは平和記念式典や戦争被害者の映像、原子爆弾の悲惨さを物語る番組が毎年放送されています。画面を通して見ていた事を実際に体験できる事は、自分にとって貴重な経験になるのではないかと思ったからです。以上の理由から、広島に行くことを決意しました。そして、この機会に戦争について沈思黙考し、平和都市宣言の意義、戦争の悲惨さ、命の尊さを伝えられるよう、平和大使としての任務を遂行してくることを宣言しました。

広島で特に印象に残ったのは、広島平和記念資料館です。資料館には、被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や資料が展示してありました。原子爆弾投下直後の広島は、あちらこちらで助けを求める叫び声が聞こえ、変わり果てた街は方角も何も分からなかったようです。背中の皮膚が足まで垂れている人、コンクリートの下敷きとなっている人、全身真っ黒な人、有名な原爆詩、「げんしばくだん」には、「げんしばくだんがおちると　ひるがよるになって　ひとがおばけになる」と書かれています。資料館の資料が、その事を物語っていました。被害者の状況が、数々の写真パネルに写されていました。余りの悲惨さに言葉がありませんでした。

次に行った国立広島原爆死没者追悼平和祈念館での被爆体験記朗読会でも、被爆者の方々が核兵器の非人間性と戦争の悲惨さを話してくれました。その言葉一つ一つに重みと思いが込められていました。

そして八月六日の平和記念式典こと広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参列しました。毎年テレビで見て、興

味は持っていました。ですから、参列できてとても光栄に思いました。平和への誓いのこども代表の発表が素晴らしくて、心に沁みました。特に、

「私たちには、被爆者から託された声を伝える責任があるのです。一人一人が、自分の言葉で、丁寧に、戦争を知らない人へ　次の世代へ　世界の人々へ　命の重さを　平和への願いを　私たちが語り伝えて行きます。」

というところです。この「私たち」という言葉の中には、平和大使としての私も含まれているのではないか。それから、私も被爆者から託された声を伝える責任があるのではないのか、と考えました。石岡中学校に戻ったら、皆に広島で学んだ事を伝える義務があります。私も平和への誓いを語った二人のように、自分の言葉で命の尊さと平和への願いを伝えようと決意しました。そしてこの思いを、夜に行われたとうろう流しのとうろう作りに込めました。平和記念公園にはたくさんの鶴があったので、鶴の絵を書きました。鶴は亡くなった貞子さんが生きたいという気持ちを込めて折ったものです。千羽鶴を献納した時にも感じましたが、広島にとって鶴が平和の願いの籠められた物だと感じました。そして今やその活動は、広島だけではなく世界にまで広がっています。千羽鶴の献納の様子を見てみると、海外の人も鶴を献納しに来ていて、献納されている千羽鶴を見てみると、たくさんの種類の外国語で文字が書かれている物が多数あり、平和への願いが世界中に確実に伝わっている事が分かりました。とうろう流しでも大きな鶴が流されていました。光に灯された鶴は幻想的で美しかったです。鶴と一緒に流されていたとうろうにもそれぞれ、祈りの言葉が書かれていました。色とりどりのとうろうが静かに流れていました。

広島に行くことで私は結団式の二つの目的を遂行することができました。宣言した通り、戦争の被害をこの目で見、聞いて来ました。画面の向こう側の世界を体験して来ました。予想以上に、広島で学んだ事は、大きな経験となりました。もう二度と平和記念式典に参加する機会は訪れる事はないかもしれません。参加して本当に良かったです。

これから、学校でこの体験について皆に伝える事になります。丁寧な言葉で、見て聞いて感じた事を、心を込めて伝えていきたいと思います。私は、平和大使として、命の尊さ・平和への願いを伝えていく人々の一員となれるようにしていきます。

優秀賞

私の夢

ひたちなか市立勝田第二中学校　三年　卜部　和奏

私は将来、科学に関わる仕事がしたい。そう思うようになったきっかけは二つある。一つは四年前に金環日食を見たことだ。日食があることは何度もニュースで報じられ、私もそれを見て、知っていたが、生まれて一度も見たことがなかったからとても楽しみにしていた。初めて金環日食を見た私は「なぜ太陽がリング型に見えるのだろうか。」と疑問を抱いた。その仕組みをインターネットなどで調べたところ、いくつかの偶然が重なって、作り出されることが分かった。そして、なぜ自然界でこのような偶然が起こるのか、もっと知りたいと思った。

もう一つは、テレビで人の体のミクロの世界についての解説を見たことだ。体の中には無駄なものが一つとしてなく、どの細胞も一生懸命、自分の役割を果たしている。私の体も見えない働きによって生きていることを知り、とても感動した。だから私はもっと体のことを知りたいと今も思っている。まだ知られていないことがたくさんあるだろう。そのまだ知られていないことをもっと知りたいと思った。それらが私の科学に関わる仕事をしたいと思ったきっかけだ。

もともと私は理科が苦手でテストでも、良い点がとれたと満足できたことはほとんどなかった。でも、これらのことがきっかけで理科の勉強を飽きることなくできるようになり、徐々に点も上がっていった。

今年の夏、高校見学に行った。その高校には、科学を専攻するクラスがあり、そのクラスの生徒の発表を聞いた。そのクラスは、今活躍する人数が少ない女性科学研究者を育成するクラスで物理や生物、地学など様々な分野を研究していた。また、そのクラスの発表は、まず日本語でクラスの魅力や研究内容を紹介し、次に英語でアメリカや県外での活動の発表をするというもので、どの生徒も英語が上手だった。海外での研修が多く、たくさんの科学に関することを学べるこのクラスに入りたい。

しかし、入るためには英語と理科をもっと得意教科にする必要がある。英語は五科目の中で一番得意だが、人と英語で会話することには自信がない。だから、今までと同じように文法や会話表現を学ぶのに加えて、人と英語で会話することにも少しずつ慣れていきたい。二〇二〇年には東京オリンピッ

クがあるので日本にたくさんの外国人が来る。そのときにボランティアとして役立てるように一生懸命勉強していきたい。理科の得意分野はもっとくわしく学び、苦手な分野は必ずこく服していこうと思う。

私が研究者になったら、研究したいことが二つある。一つ目は細胞についてだ。今、がん細胞を新しい細胞に生まれかわらせる研究を世界中の研究者がしている。でも成功するのはその中のほんのひと握りの研究者だけだ。その人たちと一緒に研究してみたいと思う。この仕事は生まれつきがんをわずらってしまった子供たちやお年寄りなどたくさんの人の命を救うことができる、すばらしい仕事だ。

二つ目は宇宙についてだ。私たちは金環日食だけでなく、様々な天体ショーを見ることができる。それらを美しく作り出す天体があり、それぞれの引力によって、決まり通りに並び、動いている。とても美しいと思う。そんな宇宙にもまだまだ解明されていないことが数多くある。例えば、土星の周りをキラキラと輝きながら回り続けている輪はなぜできたのか、なぜずっと輝き続けているのか、一つの惑星だけでもこれだけのなぞがある。それらを美しく作りあげてきた、とても長い宇宙の歴史となぞを研究できたら、きっと幸せだと思う。

これらの理由で私は科学者になりたい。今はまだ苦手な分野も多く、研究者になるためにはたくさんの課題がある。その課題を全てこく服するのは辛いこともあるだろう。でも、科学の進歩は地球や人々の役に立つことだから、それを支える女性科学者の一人になりたいと私は思う。

---◇---

優秀賞

今の社会と私

筑西市立下館西中学校　三年　桜井　航希

歩けない子ども達は、その子の為にカスタマイズされたオンリーワンの車椅子に乗っています。座ることのできない子には、上半身を固定するベルトがついています。日常生活では出会うことがない子達に出会ったのは、僕のかかりつけ病院が県立医療大学付属病院になったときのことでした。待合室で何人もの車椅子に乗った子達に出会った時、なんだか怖いような気持ちがしました。ほとんどの子達が重複した障が

いを持っていて、話している子がいませんでした。身の置き所がないような感じがしてしまったのです。

なぜ、重複した障がいのある子達に普段出会うことがないのか、あるお父さんの話でわかりました。「学校に入る前の年、教育委員会の人が家をたずねて来て、義務教育だから、養護学校に入学してくれと言われた。だけど、一日登校して風邪をもらって肺炎を起こして二週間入院なんてことを繰り返すなんてとんでもない。絶対学校なんて通わせたくないと思った。実際、入学してみると、入学する年には少し丈夫になっていてそこまでのことはなかったけれど。」と話していたのです。先天的に障がいのある子は、体質的に弱い人が多いから外出もあまりできないのだと、その時知りました。家と病院を行き来するだけの生活を送っている子も存在するのだと知りました。

僕も小学校に入学する前の年、週二回、作業療法と言語療法のリハビリの為、病院に通っていました。他に市の支援センターの集団指導に週一回通い、月二回の個別指導も受けていました。僕には僕よりも障がいが重い弟がいるので、弟が県の通園施設に通っている間に、幼稚園を早退して通っていました。普通小学校に入学することを目指して、沢山の専門職の人達が僕を支援してくれました。その支援のおかげで、僕は普通小学校に入学し、かつて持っていた障がい者の手帳も今は非該当で持っていません。

たしかに、障がいのある人が生きていくには沢山の人の支援が必要で、費用もかかります。でも、誰が好き好んで支援が必要な状態にいるでしょうか。誰しも自分の足で自分の行きたい所に行きたいでしょう。弟は歩けますが、一人で外出できません。危険の回避ができないからです。弟が幼い頃、こっそり一人で家の外に出てしまい、弟を車でひきそうになった人に保護されたことがあります。一人で友達の家に遊びに行くこともできないのです。自由や自分での選択というものがほとんどありません。テレビなどで外の情報が入ってくるけれど、自分自身は自由に身動きとれません。本人が一番つらいに決まっています。

病気で半身不随になった大人の男の人が、「運転免許証と健康な体があれば、どこでも働けて自由になるのに。」と話していました。働いて収入を得て、自力で生活し、余暇を楽しむという、大多数の人にとってあたりまえのことが、叶えられない夢だという人が、僕の回りにはいつも身近にいました。弟は特別支援学校に通い、定期的に病院に通っています。母

は四年半前に准看護師資格を取り、今は通所リハビリテーションの施設で働いています。僕も中学校の体験学習で、母の職場を見学させてもらいました。利用者の人達は少しでも良くなりたくて、一生懸命リハビリをしていました。

僕達は高度に科学技術が発達した社会で生活していて、他人の仕事の恩恵を受けて生きています。一人暮らしをしていても、他人の助力なしに生きているとは言えないと思います。多かれ、少なかれ、他人に支えられて生きているのだと思います。障がいのある人をその家族だけで支えるのは難しいことです。社会全体で支えていこうという今の社会の仕組みは素晴らしいことだと思います。

僕も将来、人を支援できるような仕事がしたいと思います。例えば、原因不明で生まれつき歩けない人達の神経を研究する医師や、リハビリの先生などには憧れますが、残念ながら僕は成績が良くありません。将来のことは、まだ考え中です。ただ、障がいのある人もない人も支え合って生きていけるような社会の小さな歯車の一つとして働ける大人になりたいと思います。今は、毎日精一杯目の前のことを頑張っています。

奨励賞

大人になる

つくば市立桜並木学園並木中学校　一年　亘（わたり）　虹海（ななみ）

「はぁぁぁ。」

と私はため息をついた。テレビでやっているニュースは一つもおもしろくない。

『大人って何だろう。』

中学生になってからいつも思うことだ。今の大人達は、ポケモンGOがどうだ、都知事がどうだ、と騒いでいる。そのたび私はこう思う。今の社会ってめんどくさい。

今の大人達は、ちょっと失敗した人をいっせいに、もう立ち上がれないぐらいせめたてる。つい昨日までまつり上げていた人を、まるで手の平をかえすように……。一人がそれを始めるともう止まらない。私は思う。

『もっと大切なことがあるんじゃないの。』

でも大人達は子供の言ってることに見向きもしない。本当に大事なことを話したくても。

私がこう思うようになったのは今年の一月からである。

一月、某タレントの不倫騒動でメディアは揺れた。その時の大人達のせめよう。異様だった。そんなことばかり盛り上がって、大事なことに目がいかない。そして、相手の意見を聞かなくなる。いつだってそうだ。沖縄の問題、安保法案の時もだ。明らかに矛盾している。私達、子供には、

「相手の意見を聞きなさい。」

って言うくせに……。

『相手の意見も聞かないのに何がわかるんだろうか。相手の弱いところを責めて、楽しいのだろうか、誰が得をするのだろうか。』

と、私は思った。それから、遠目でニュースを見てもいつも同じだった。

『これじゃあ、イジメみたいじゃん。』

ふと思った。一人の人ばかり、責め続ける。

『仕方がない。』

と思う人もいるかもしれない。でも、それが子供の世界で起きると大人達は口をそろえてこう言う。

「イジメはダメでしょ。」

何が違うのだろうか。大人達の世界と……。

それから私は、こんな大人にはなりたくないというより、大人になりたくない、と思うようになった。こんなイジメのような世の中で生きるなら、子供の世界のままでいい……。でも時間は止まってはくれない。少しずつ、大人の世界へと近づいていく。怖い。大人になるのが怖い。でも、もう少しで大人の世界の仲間入りになるという思いと、大人になりたい、いつまでもとり残された気持ちはいやだ、という思いが交差する。

『大人になるって何だろう。』

『大人って何だろう。』

『どんな気分なんだろう。』

『今の社会ってなんだろう。』

考え出すときりがない。そして、答えも見つからない。どうすれば答えが見つかるのだろうか。考えてみる。でも答えを見つけるすべがない。

『私はどうすればいいんだろう。どうすれば大人になれる?。』

でも、『答え』なんて見つからないのかもしれない。こういう、気持ちを経て、大人になっていくのだろうか。やりたいこと、やってみたいことを一生懸命、精一杯やれば何か『答え』が見つかるのかも知れない。そう思うようになってからは少し『大人』に対しての見方が変わった気がする。人を攻めたてる

人もいるがそんな人ばかりではない。少なくとも私の周りの人達はそうだ。しっかり相手の意見を聞いて、判断する。
『大人って意外と、思ってたよりもおもしろい世界なのかもしれない。』
そう思った。
『こんな私でも、いい大人になれるかな。』
今は、とっても不安だ。けれど、私の背中には応援してくれる人がいる。大人ってとっても難しいかもしれない。でもそんな世の中でも生きていけるように、今いろいろな事を勉強して、たくさんの時間を友達と過ごして、精一杯、中学校生活を楽しもう!!
いい大人になるために……。
素敵な大人になるために……。

奨励賞

「言語」という大きな壁を乗り越えて

茨城県立古河中等教育学校　一年　永木　優菜

「ノー、ダイジョブデース。」
ふと気が付くと、私のとなりで困ったことが起きていました。
それは、先日私がショッピングモールに出かけたときのことです。その日はいつも以上に外国人客が多く、あちこちで聞き慣れない言葉が飛び交っていました。私は、時折聞こえてくる外国語での会話に耳を傾けながら、百九十もの国々の中から日本へ行こうと思ってくれた人がこんなにもいることを改めて実感し、とてもうれしく思っていました。
そこで、ある事件に出くわしたのです。お店のレジに並んでいると、となりには外国人の親子がいました。店員さんとそのお母さんは、お互いに言いたいことをうまく伝えられていないようです。店員さんはおどおどしながら他の店員を呼び集め、レジを待つ人の長蛇の列はさらに長さを増して「大長蛇の列」になり、その場にいるみんなが焦っていました。
「こう言えばいいのかな。でも間違えていたらどうしよう。単

語を並べるだけでもいいのかなあ。身ぶり手ぶりや顔の表情をつければ伝わるんじゃない？」

私の心の中の「一人会議」の始まり。こうしてあれこれと考えをめぐらせましたが、結局、私にそんな勇気はないということだけが分かりました。私だけではなく、周りにいた学生や大人も同じように、助けてあげたいと思ったはずです。でも、不安、そして恥を恐れる気持ちが勝り、見て見ぬふりをしてしまったのです。手も足も出ず、その場に立ちすくむことしかできなくなった私。すると、困った母親の後ろに隠れていた幼い少女が、何やら口を開き始めたのです。

「ノー、オーケー？」

少女は、カウンターからぴょこんと顔を出し、店員さんの話を聞き、小さなか細い声で一生懸命にお母さんに通訳をしていたのでした。

すごい。何てことだ。私は一瞬、自分の耳、目、全てを疑いました。小さな小さな少女が、日本語を英語に訳して伝えている。その場は驚きのあまり、しんと静まりました。

私達が英語を難しいというように、この子にとって日本語がどんなに難しかったことか。また、大勢の人に囲まれながら店員と話す少女は、まるで本物の通訳のようにクールでした。その様子をただ呆然と見つめる私は、実は近い将来に英語が必要になった時のためにと、幼い頃から英語を習わせてもらっているのです。しかし、それを役立てることができませんでした。

「これでは、せっかく英語を習っているのに意味がない。」

私は自分を責めました。それに、英語が分からなかっただけではありません。私には助けようとする勇気すら湧いてこなかったのです。彼女の行動を見て、自分の英語力のなさ、勇気のなさを思い知らされました。さらに、あれだけ多くの日本人がいたにも関わらず、誰も間に入ることができませんでした。悔しい。情けない。自分として、日本人としての後悔だけが残りました。

今、日本はとても大切な時期であると思います。外国人観光客が増えていて、四年後には東京オリンピック。これからはもっと多くの外国人が訪れるでしょう。そんな中、施設の建設や改善はどんどん行われていますが、肝心な言葉のほうはどうなのでしょうか。英語は、今や世界共通語。英語が話せれば、世界の約三分の一の人と会話ができるとも言われているくらいです。私の家の近所に住むタイ人も、母国語であるタイ語の他に英語はペラペラ、さらには中国語まで勉強し

てから日本に来たそうです。そして、今は日本語を勉強しています。

海外ではみんなマスター済みである英語。日本でももっと勉強をして、話せるようになってほしいと思います。そうすればきっと、せっかく来てくださった外国人を言葉の面で困らせてしまうことはなくなるでしょう。これから先も、同じような場面に出会うことはある、というより、増えていくと思います。そんな時、周りにいる人で解決できたら嬉しいです。

それが、日本と外国とをしっかり繋げるための第一歩。日本が日本人だけでない日本になり、さらに活気で溢れていくためにも、私は英語を勉強し続けます。四年後の私が、東京オリンピックの舞台で多くの外国人と触れ合い、手助けをしている私であるように。

「言語」という大きな壁を乗り越えて。

奨励賞

手術を受けて気付いたこと

茨城町立明光（めいこう）中学校　二年　髙田（たかだ）　直紀（なおき）

今年の一月二十八日、僕は東京の病院で大きな手術を受けた。僕は先天性脊柱側わん症で、生まれつき背骨が曲がっている。一歳の時からずっと経過観察をしてきたが去年の夏、専門の医師がいる病院に転院し、すぐに手術をすすめられた。

転院して初めての診察で、できるだけ早く手術する必要があること、手術をしたら中学生のうちは部活レベルの運動ができなくなることを聞かされた。本当にショックだった。生まれて初めての手術に対する恐怖や不安はもちろん、自分の体のこと、がんばっていた部活ができなくなるつらさ、学校のこと、将来のこと…色々な思いが一気に押し寄せて言葉が出なかった。言いようのない不安に押しつぶされて泣きそうになった夜もあった。

それでも僕は手術を受けることに決めた。将来の自分のため、側わん症と向き合うのは今だと思ったからだ。術後は日常生活が満足におくれず、「手術なんか受けなければよかった」と思ったこともある。でもこの手術を通して、僕は二つの大

切なことに気付くことができた。

一つ目は、人は友達や家族などたくさんの人に支えられているということだ。

手術が決まるとクラスや部活の友達が手紙などで僕を励ましてくれた。わざわざ神社で御守をもらってくれた友達や、入院中退屈しないように本や漫画を届けてくれた友達もいた。手術後はみんなが僕の体を気遣ってくれ、出られない授業のノートをとってくれたり、荷物を持ってくれたりして助けてくれている。一番うれしかったのは、クラス全員で僕のために文集を作ってくれたことだ。これを読んで、僕は「友達っていいな」と思い、早く学校に戻れるようにがんばろうと思えた。

家族や学校の先生にも、手術が決まってからずっと、僕のためにいろいろとしてもらっている。友達だから、家族だから、仕事だから当たり前と思うかもしれない。でもみんなが僕を思い、僕のために力を貸してくれていることを僕はずっと忘れないでいようと思う。そして今までは気付かなかったけど、手術する前からずっと僕はこんなふうにたくさんの人に支えられてきたのだろう。今の僕は自分のことだけで精いっぱいだけど、また手術前の生活が送れるようになったら今度は僕が周りの人のために力を貸せるようになりたいと思う。

二つ目は「普通の生活」のありがたさだ。手術は気が付いた時には終わっていて、回復も順調だった。けれど、立てるようになってからが大変だった。手術をしたことで、今までと体のバランスが変わってしまい、初めはまっすぐ立てているかどうかも分からなかった。着替え、移動、入浴など今まで当たり前に自分でしていたことのほとんど全てに介助が必要になり、学校にも満足に通えない。周りの友達の変わらない様子を見て、同じようにできない自分が情けなくなったり、「どうしてこんなことができないんだろう」とイライラしたりした。朝早く自転車で登校し、授業を受けて部活をする毎日が手術前は当たり前だった。でもそのように健康で、みんなと同じように過ごせることはとても恵まれたことだと気付いた。

手術を受けて、僕にはもう一つ得たものがある。それは「薬剤師になる」という夢だ。僕は小さい頃よく病気をして薬のお世話になってきた。そして今回の手術では、痛みがひどくつらかった時に痛み止めに救われた。眠れないほど痛い時も、薬があると思うだけで少し気が楽になった。だから薬は病気や痛みを予防したり治したりして、健康な生活を守るだけでなく、病気や痛みで苦しい心を支えるものでもあると思う。

手術を経験した僕だからこそ、病気や痛みに苦しむ人の気持ちに親身に寄りそえる薬剤師になりたい。

手術から半年がたった。手術前の生活が送れるようになるにはまだ時間がかかるけど、人に支えられていること、普通の生活のありがたさ、そして将来の夢を大切に生きていきたい。

◇

奨励賞

自然を考える

土浦市立土浦第一中学校　三年　戸田　壮太郎

自然とは何だろう。植物のことだろうか？家の近くにある山や海のことだろうか？人間が手を加えていない場所だろうか？僕は、僕たちが住んでいるこの地球、この宇宙すべてが「自然」だと思う。だから、人の一挙手一投足が自然を変化させることにつながるし、そもそも、人間というのもその生活も、「自然」というものの一部だと言える。つまり、環境問題というのは本当に身近なものだ。

僕の住んでいる町は霞ヶ浦というとても大きな湖に面している。この湖は広いわりに浅く、今では少し改善してきているがとても汚い湖として認識されている。僕が通っていた小学校でも、今通っている中学校でもこのことについて調べたり考えたりする機会は何回もあったが、身近な湖について深く考えたのは中学二年生の夏、自由研究でウキクサについて調べたときだ。ウキクサとは湖面や田の水面に浮かんでいる小さな植物で、僕はこのウキクサと水質の関係について調べた。このウキクサを観察していて、驚いたことがあった。ウキクサをとってきて、水道水や霞ケ浦や近くの川の水などで育てるという観察をしていて、水道水で育てようとすると数が少なくなってしまったのだ。水道水は塩素がぬけるように沸騰させておいておいたので、僕は「清潔な」水道水ではさぞかし数が増えるのだろうと予想していた。しかし結果は違った。

どうしてそうなったのかを調べていて、これだという原因は見つからなかったが、調べている途中で、湖の水や川の水は、とてもたくさんの種類の物質やプランクトンなどの生物を含んでいて、更に川の水と湖の水でも含まれるものが微妙に違ったり、地点でも違ったりするということが分かった。この時、

僕たちがふつうに「川の水」「湖の水」とよぶ水は、いろいろな「自然」がつくりだしたとても複雑な、人の手ではつくれそうにもない大切なものであるということも分かった。そして、そうしたものを変えてしまえる人間の責任というものも感じた。観察では、水の中に十円玉を一つ入れてしまうだけで、水が毒性になり、ウキクサは全て枯れてしまった。そして霞ヶ浦という大きい器でも、人間の出す生活排水、工業排水によって水質が変わりさまざまな問題が発生しているということが分かった。更に人間が持ちこんだ外来生物による生態系の変化という問題があることも分かった。人間は、良くも悪くも「自然」を変化させてしまう大きい力を持っていて、より良い環境をつくる責任もまた背負っているということを強く感じた。そして、僕も自然の一部として、ずっと良い自然を残していきたいと思った。

　そのために何ができるだろうか。個人でできること、行政でできること、企業でできること、いろいろあるだろう。その中で、最も重要で最も根本的なのは、身の回りの自然を美しいと思うこと、自分も自然の一部であると自覚すること、そして自分を含めた自然を愛することではないだろうか。そしてその未来をつくっていくことではないだろうか。霞ヶ浦の話に戻ってみると、まず、水を汚さない、水を大切にする、ということが大切だろう。ごみを少なくすればごみ処理場での二酸化炭素排出量が減り、工業排水の量も減るだろう。また二酸化炭素の排出量が減ればわずかでも地球温暖化の抑制に貢献できるのだ。

　このように、良い行動は良い連鎖を生む。その逆もまた同じだ。僕たち一人ひとりが、「こんな小さなことなんて」と思わず、ひとつひとつの行動についてもっと良く考える必要があるのではないだろうか。一つひとつの行動が未来をつくるのだから、未来は可変である。まだいかようにも変えられるだろう。

　そして、良い環境をつくることは結局自分や周りの人の利益になると思う。人が昔から自然と共に、自然を利用して生きてきたように、科学技術の進んだ現代も、人々の生活は自然の恩恵無しでは成り立ち得ないのである。更に人間の文化も、周りの自然と密接に関わり合っていることが多い。つまり自然を守っていくことは人々が自分たちの生活、文化、そして未来を守っていくことに他ならない。

　環境問題に関わらず、未来の人々も含めた「自分達」を大切に思い、地球に生きる全てのものよりよい未来の実現に

向けた恒久的な努力をしていくという姿勢は、他のいろいろな問題を解決していくのにとても大切な姿勢であろう。僕も、自分で未来をつくっていくという決意をもって、一つ一つの行動についてよく考え、よりよい未来をつくっていきたい。みんなで行動すれば意識はよりよくなっていき、それが「自然」になるだろう。そんな未来をつくりたい。

―――――◇―――――

奨励賞
きっと大丈夫

かすみがうら市立下稲吉（しもいなよし）中学校　三年　辻井（つじい）　茜（あかね）

私は生徒会会長選挙に落ちた。今でもあの日のことを思い出すと胸が苦しくなる。友人も母も私に言った。「こういったことは時間しか解決しないから。」しかし時間は簡単には解決してくれなかった。毎年楽しみにしていていた年末のお笑い番組。今年は全くおもしろく感じない。笑うことができなかった。

いつまでも落ち込んでいる私に、母からラインが届いた。「過去の事を悔やんでも、やたら闘争心を燃やしても、今は自分を苦しめるだけ。過去や他人は変えられないけれど、自分と未来は変えられるから。茜はきっと大丈夫。」

前へ進まなければならないことは分かっていた。私は小学校の頃が懐かしくなり、卒業文集を開いた。好きな言葉は「努力の天才」将来の夢は教師になること、水泳で茨城国体に出場すること、と書いていた。茨城国体、あの時は本当に叶う可能性のある夢と思って文集に書いた。しかし今となっては口に出すのも恥ずかしい遠い夢となっていた。気付けば私は学校や生徒会活動の楽しさから、水泳の練習が疎かになっていた。あの日の結果を自分で納得するためにも泳ぐしかないと心に決めた。自分の未来を変えるために。

私はそれまでは水泳の短距離選手だったがタイムは伸び悩んでいた。これを機会に伸びる可能性のある長距離選手に転向することにした。そして毎日ひたすら長い距離を泳いだ。無理して食べて、体を作った。中学総体まで残された時間はあと六ヶ月。学校と水泳、それだけの毎日だった。

県南水泳、不運なことに一週間前に体調を崩してしまった。珍しく熱の風邪をひいた。吐き気の微熱の残るまま八百メートル泳いだ。県の基準のタイムはクリアして県大会に出場す

ることはできた。そんな状態で迎えた県総体、私は県で七位、惜しくも関東大会を逃してしまう。総体前の一ヶ月は、記録が伸び悩む上に、体調不良まで重なり、慌ただしく本当に苦しい時間だった。そして何度も泣いた。総体の後は放心状態で何も手につかなかった。

はたして未来は変えられただろうか。半年あまりでは何も変わらなかった。また現実の厳しさを身に染みて感じた。そして自分はいつの間にか心も体も強くなってしまっていた。それは決して私の本意ではない。

「きっと大丈夫」母の言葉。大丈夫と言われても、良い結果が出るわけではない。しかしその言葉は、結果を意味しているのではなかった。思わしくない結果になっても、辛いことがあっても、私には共に悲しみ励ましてくれる仲間や家族がいるから大丈夫、という意味だと思う。思えばあの日、私にはたくさんのラインやメールが届いた。みんな一つ一つ言葉を選んで私を励ましてくれた。学校に行くと、たわいのない話をして笑わせてくれた。優しい言葉で私を心配してくれた。その時「茜は大丈夫」と心の中で感じていたのかもしれない。

喜怒哀楽が激しい私は、この先何度も、泣いて怒って落ち込んで、立ち直りまた笑ってを繰り返していくだろう。でもきっと私は大丈夫。

私の将来の夢は変わらず教師になること。「きっと大丈夫だよ。」そう言って前に進めるように生徒の背中を押してあげたい。私の大切な友達が悲しいときは一緒に泣いて、うれしい時は思いっきり喜んであげたい。

今年のオリンピックで、吉田沙保里選手の涙にもらい泣きした。私には吉田さんの気持ちがよく分かった。競泳平泳ぎの金藤理絵選手。二七才で金メダルを獲得した。高校生の頃から記録が伸びて注目されたが、怪我や成績不振で何度もやめようと思ったそうだ。二人の重ねた努力は計り知れない。

私がこれから水泳を続けるのは、厳しい道になるだろう。結果が伴わない気がして不安だ。努力は報われるとは限らない。勝って笑う人より負けて泣く人が何倍も多いはず。でも、努力しなければ、勝って笑うことはできない。私は中学三年間で何度も壁にぶつかった。壁は越えたかった。壁は破りたかった。私はまだ自分の限界を認めたくない。

私はまた今日から少しずつ重ねていきたい。自分の未来を変えるために。努力の天才を目指して。きっと私は何でも大丈夫。

あとがき

小中学生の皆さん、今年もたくさんの素晴らしい作品をお寄せいただきありがとうございました。

今年は、次の通り四五九校から一八、九三二編もの応募をいただきました。

（応募学校数と応募作品数）

小学校　三三七校　一四、二四八編

中学校　一二二校　四、六八四編

応募作品の中から、慎重に審査していただいた結果、入賞作品数や入選作品数は次の通りとなりました。

（入賞作品数と入選作品数）

小学校　入賞　二二編、入選　六八編

中学校　入賞　一一編、入選　三四編

今年も「小平記念作文」の実施にあたり多くの方々のご理解とご支援をいただきました。茨城県教育庁・各教育事務所および学校関係者の皆様、ご家族の皆様、そしてご多忙の中、審査くださいました審査委員の先生の皆様に本紙面を借りて厚くお礼を申し上げます。

この「小平記念作文」が小中学生の皆さんの成長に少しでもお役に立てれば幸いです。

平成二十八年十二月

「小平記念作文」事務局

（公益財団法人　日立財団）